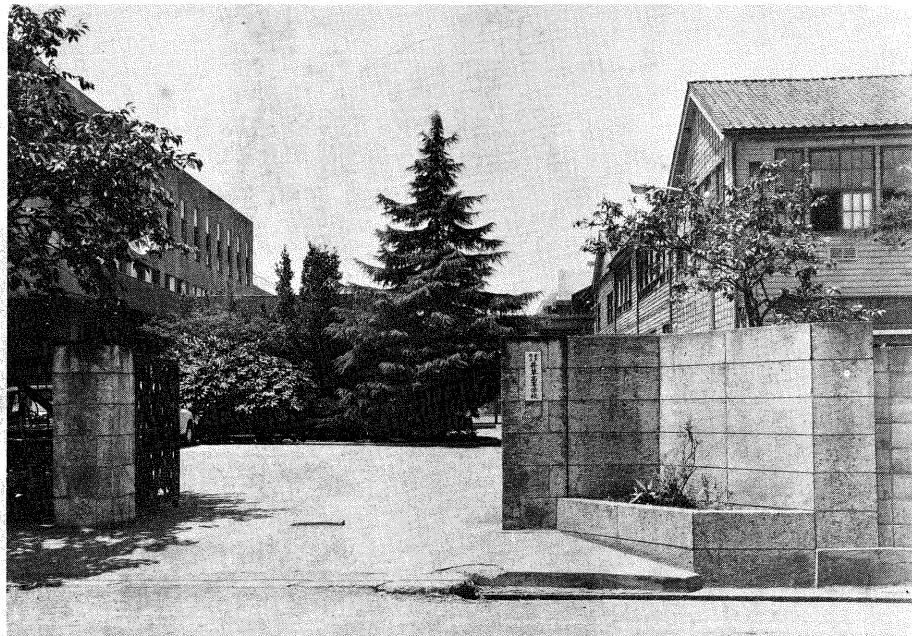


井草高校



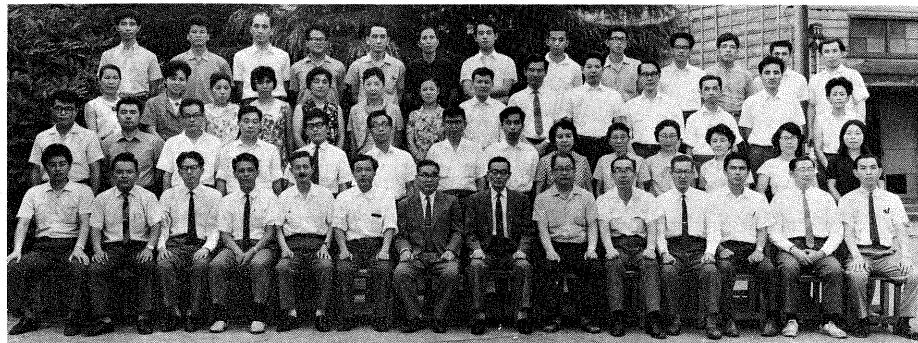
25周年記念誌

門正校本



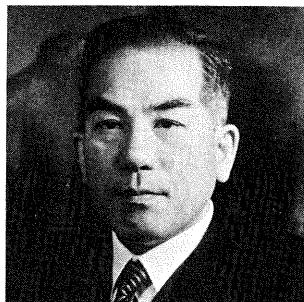
現職員

杉野(英語) 菊地(事務) 大和(養護) 久我(理科)
和田(事務) 潤脇(英語) 菅野(数学) 山本(国語)
田中(事務) 水野(国語) 占屋(理科) 大隅(社会)
山田(英語) 宮脇(理科) 玉置(家庭) 工藤(英語)
植村(社会) 小池(数学) 三上(英語) 岡垣(社会)
茅根(体育) 武林(社会) 福島(英語) 福田(定・主事)
森(理科) 井上(理科) 荒田(英語) 前島(校長)
林(理科) 鈴木(体育) 白井(社会) 宇井(教頭)
尾崎(数学) 西浜(家庭) 西野(数学) 青山(美術)
吉田(社会) 橋本(事務) 世間漸(事務長)
桑幡(国語) 川島(事務) 谷(国語)
鶴田(国語) 坂上(事務) 渡辺(数学) 渡辺(国語)
広川(英語) 山田(国語) 松原(理科) 天野(体育)
合田(体育) 三柳(体育) 佐藤(音楽)





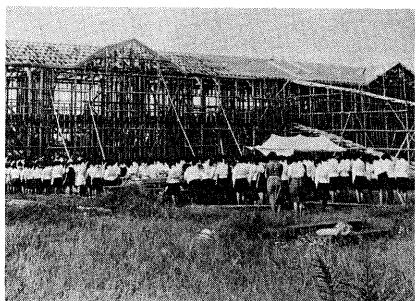
三代校長 高柳一二先生



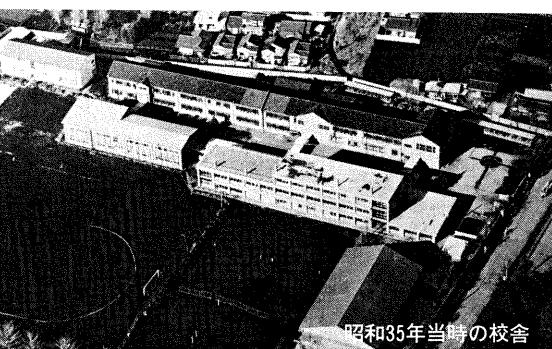
二代校長 杉山文雄先生



初代校長 広瀬政次先生



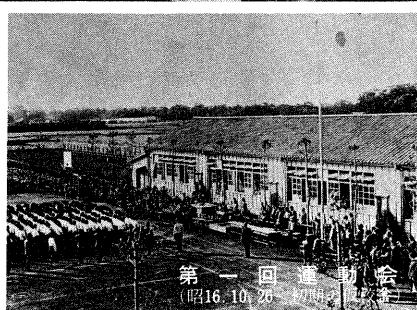
東校舎上棟式（昭17. 7. 25）



昭和35年当時の校舎



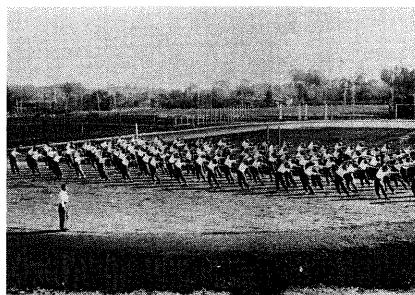
昭和21年頃の校舎全景



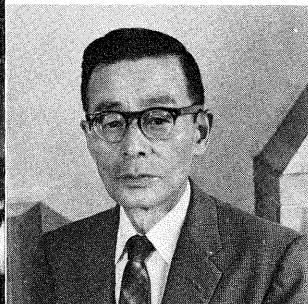
第一回運動会
(昭16. 10. 20 初神の日)



東校舎建設地鎮祭（昭16. 11. 18）



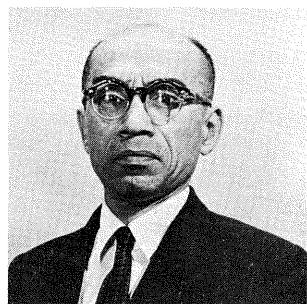
昭和21年頃の校庭



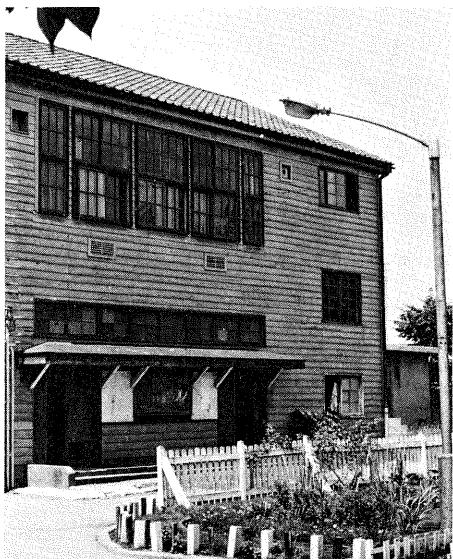
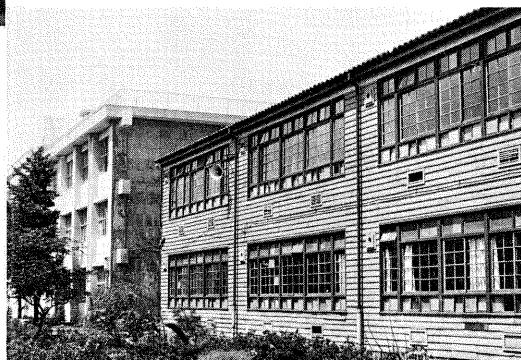
現校長 前島寿一先生



五代校長 藤井 茂先生

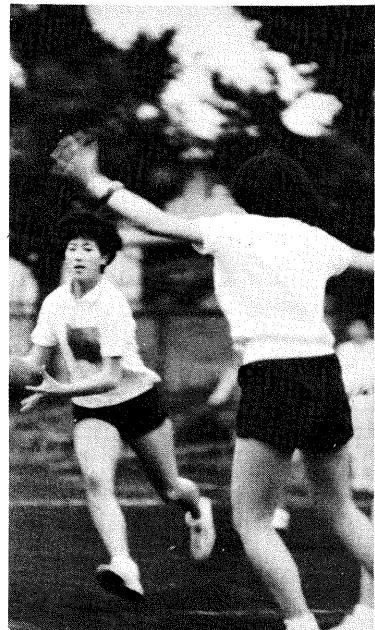


四代校長 真田幸男先生



(林間学校
昭41完成)
⇒からまつ山荘

文化祭（於文京公会堂）



一九六六年 学校生活

スナップ四点



体・祭（仮装行列）



臨海国是（於豆田）

上井草界隈



誌

田村力子
時計店

中華一校



25周年記念誌

井草高校・二十五周年記念誌・目 次

表 紙 本校全景カラーライフ写真
グラビヤ 職員・歴代校長・旧校舎およ
び井草高校付近等の組写真集
とびら 「樹木」 青山兵吉・画

卷頭言 創立二十五周年を迎えて 前島壽一 (四)

特稿別
井草のしおり (六)

井草という校名 杉山文雄 (六)
一つのそう(挿)話 高柳一二 (七)
サッカー・同数共学・いえだに

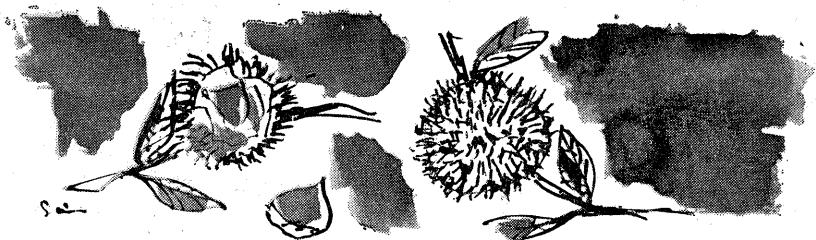
真田幸男 (八)

藤井茂 (九)

井草の思い出 磯部正一 (二)

二五周年に寄せて

△学校沿革史 (三)
(付)定期制課程沿革 (三)



特集 懐旧座談会

（四）
旧職員・卒業生の語る古き
懐しき井草の思い出と歴史

司会 岡垣先生

定時制 今昔物語

福田 薫（元）

古いアルバム——卒業生回顧録——

特別
記事

北の国から 沢田詩子（三）
一九五四年卒業 早坂玲子（三）
私の井草時代 大友和夫（四）
大西芳江（三）

二階建ての多い
ヨーロッパの農家 生野真直（三）
ヨーロッパ旅行随感 平井英一（三）

生徒会活動・ハイライト

【寄稿】 現在の生徒会 中田央（三）
生徒会について 猿子竹夫（三）
報（学芸部・運動部） 井草祭 荒川俊昭（四）
新聞の楽しみ 倉重哲幸（四）

○井草高校・からまつ山荘案内

（四）

○校歌

（四）

創立二十五周年を迎えて

前 島 壽 一
(校長)



本校は昭和十六年二月四日、広瀬政次先生が校長に補せられ、東京府立第十八高等女学校として創立され、同年四月五日、中野区鷺宮五丁目三八三番地に仮校舎をおき開校した。以来二十五年の歳月を経て今日に至った。昭和十二年七月に起つた日中戦争がいよいよ長期戦化し、さらに、十六年十二月八日、アメリカ、イギリスへの宣戦布告に先立つて、日本艦隊とその航空部隊はハワイの真珠湾を奇襲、太平洋戦争へと突入した。このさなかに本校は一年学年五学級二五〇名の女子生徒を入学させ、呱々の声をあげたのである。この大戦争による国力の疲弊と人心の不安動搖の中で、校長はじめ職員一同のご苦心はさこそであつたろうと推察できる。連合軍は十七年六月のミッドウェー海戦において、日本艦隊に致命的打撃をあたえたのを転機として優勢となり、二十年八月十五日、日本はポツダム宣言を受諾し、終戦を宣したのである。日本敗退の十八年二月、現在地の本校に移転、二十年三月、東京都立井草高等女学校の第一回卒業式を行なつた。二十二年四月一日、学制改革により、第二学年、第三学年は新制中学となり、二十三年、東京都立井草新制高等学校となり、全日制一年学年五学級、また新たに定時制一年学級を入学させ、二十四年三月、高等学校第一回、高等女学校第五回、併設中学校第二回の卒業式を行なつた。二十五年一月校名を東京都立井草高等学校と改称、四月、男女共学第一回入学式を行ない、男子八〇名、女子一七〇名、五学級の生徒を入学させ、その後、男女半々の生徒を収容し、昨年度の十学級をピークとして、現在では各学年九学級、男女それぞれ二二五名の定員となつてゐる。

初代広瀬校長の戦争中のご苦労ご努力もさることながら、二代杉山文雄先生、三代高柳一二先生、四代真田幸男先生、五代藤井茂先生および職員全員の献身的なご尽力により、学校経営、校舎の増築、校地・施設・設備の拡充等が、戦後の人心の混乱と経済の窮乏にもかかわらず、着々と実をむんで、今日の隆盛になった次第である。

また本校発展に見逃せないのは、二十四年四月に、PTAと生徒会が結成されたことである。PTAにおいては、歴代会長、役員および会員の方々の物心両面のご協力とご支援とにより、体育館兼講堂、図書館が竣工、長野県の湯の丸高原に「からまつ」山荘が落成、生徒教育の面に多大の寄与をされ、生徒会は堅実な歩みをみせ、同窓会は、OBとして後輩指導に尽力されたのは勿論、同窓会室を作つて、クラブ活動その他の便に供してくださったのである。

『仏説父母恩重經』に、「一には懷胎守護の恩。二には臨産受苦の恩。三には生子忘憂の恩。四には乳哺養育の恩。五には廻乾就湿（えんじゅしつ）の恩。六には洗灌不淨の恩。七には嘔苦吐甘（えんくとかん）の恩。八には為造悪業（あくごう）の恩。九には遠行憶念（おんぎょうおくねん）の恩。十には究竟憐愍（くぎょううれんみん）の恩。」とある。これは産みの苦痛と育ての苦勞、またその恩のいかに大きいかを説いたものであつて、これこそまさに本校の誕生と成長とにあてはまるものである。「這えば立て、立てば歩め」の親心により成長をつけ、今日の隆昌と発展を見るに至つた。

昭和二十年三月、第一回卒業生が僅か一八三名であったものが、今日では合計五、七二六名、また定期制は二十六年三月第一回卒業生八名。合計五六六名となり、それぞれ社会各層の中堅として、新進として活動し、また良き妻、よき母として、活躍して、今日の日本になつてゐる。

われわれは、今日の発展までの経過をふりかえるとき、都当局を始め、幾多関係各位の涙ぐましい努力と献身があることを知り、懷胎守護の恩・乳哺養育の恩の大なるに対し深い感謝と敬意をささげ、これにこたえるよう一層の精進努力を致したく、決意と覚悟を新たにするものである。

ここに一巻を編み、先達の熱情の足跡をとどめて、今後の鑑とすべく、二十五周年記念誌とする。

井草のしおり



特別寄稿

井草という校名

杉山文

(第二代校長)……



このたび、都立井草高等学校が創立三十五周年の式典をあげられることは、関係者の一人としてまことに喜ばしく、心からの祝意を表する。

都立井草高校が、府立第十八高女として創

立されたのは昭和十六年で、私は三月はじめから初代校長広瀬政次先生のもとで書記の田中正さんとともに開校準備の事務をとった。校舎は仮校舎で、いまの武藏丘高校の敷地内にあった。二十中（大泉）、二十一中（武藏）である。

井草高校が創立された前後の国内情勢は、軍部の政治支配がしだいに強まり、戦時体制が強化されていたときで、物資はたいてい統制下にあった。やがて太平洋戦争がはじまる度に不足するようになつて、本校舎の建設はなかなか思うようにははかどらなかつた。それでも校地だけは、十六年十月いまの校舎のある練馬区上石神井一丁目に決定していたの

校地が決まったころであったと思うが、府当局から広瀬校長に学校の名称変更についての相談があった。それは、第十八高女はそのうち上石神井に本校舎を建築して移転することになるのだから、石神井高女という名称にしたいが、学校ではどう思うか、ということであった。私はそのことを聞いて、校地はたしかに上石神井に決められているのだから、それも一案ではあるが、女の学校にジイ女学校でもあるまい。それに、学校に通う電車の下車駅が上井草であるから、むしろ井草高女とする方が、この新設校を訪ねてくる人びとにも分かりやすく、親切ではなかろうか、とさえ思つた。この考え方には、学校内では全員が賛成であったし、府当局もこれを聞き入れてくれたので、第十八高女は十七年一月から井草高女とよばれることとなつた。本校舎の第一期工事（いまの北側の木造校舎）ができあがつたのが十八年一月で、そこに移転したのが二月二日—四日であるから、鷺宮の仮校舎時代すでに井草高女とよばれていたわけである。いろいろな変つたが、井草という名称だけはそのまま今日にいたつてゐる。

このような名称変更の事情を知らない、い

まの学校付近の人びとのなかには、杉並区の運動が功を奏して井草高女となつたのだと考えた人もいたらしい。練馬区上石神井に学校を新しくつくるうというのに、杉並区の地名をとつてその校名としたのだから、変に思われてもやむを得ないことであつた。

私は教頭、校長を通じて十一年ばかり井草

でご厄介になった。そのころの校舎は粗末で、殊のほか井草を愛し育てていただいた先生方、そしてよく努めてくれた生徒達の思い出はなかなかつきないが、与えられた紙面の関係もあるので、このあたりでベンをおくことにする

一つのそう（挿）話

高柳

（第三代校長）

その頃（一九五二年）校門をはいると右手に花壇らしいものがあった。そこの片すみに小さいツガの木が一本あつた。花壇は荒れていたのでここを整理して万葉植物園をつくつてみようかと思つた。一本のツガの木がそう思いつかせたのである。生物の梅木先生国語の大沢先生共に賛成してくれたので、梅木先生と二人で植物を集め大沢先生に植物名とそれを関連する万葉歌を書いた立て札をつくつてもらつた。植物は路傍や近所の林などをさ

がしたり遠足の時採集したりした。ある程度はすぐに集まつた。歌の書かれた立て札が次々にふえてゆくのはちょっと楽しかつた。少しほは見ててくれる者もあるようになつた。しかしまだ人に見てもらえるようなものではなかつた。

ところがある日、読売新聞の記者が「万葉植物園をつくっているそうだが……」とたずねて來た。まだはじめたばかりでと苦しい弁解をしながら、まだできてもしない将来の計

画など話さざるを得なかつた。ついでに武藏野の木を集め校庭の一部に雜木林をつくりたいとも話した。記者は名ばかりの万葉園に苦笑して帰つたものと思つてゐたところ、二三日後の新聞に適当なスペースの記事にしてのせてくれた。こうなると一応見られるようなものにならなくてはと心組んではみたものの、そのうちに体育馆兼講堂の建設事業がはじめられて、万葉植物園どころではなくた。その後新校舎の建築その他で移し植えた植物もあとかたもなくなり、あのツガの木も姿を消してしまつた。

体育馆兼講堂の建設が難行し頭の痛い日がつづいている間にも、あの読売の記者に話したものう一つのことが、時たまぼろしのように浮かんで消えて行つた。

今は義務教育優先で教育庁は高校など忘れているような形だが、やがては高校整備に本腰を入れることになるにちがいない。その時はこの木造校舎にかわって鉄筋コンクリートの堂々たる校舎が生まれるだらう。またその頃にはまわりの麦畑は住宅地になり、武藏野の屋敷森も次々に姿を消してゆくだらう。それはそれでいい。しかしそうなつた時にも井草にはそこはかとなくただよう武藏野の名残

をとどめておきたい。それは学校のうるおいともなるう。そこに欲しいものは自然の木立だ。八重桜もいい。イチヨウまたよし。その上にせまくとも校地の一角に武藏野の雜木林

が再現されいたらなおいいではないか。木はソロ、クリ、ナラ、クヌギ、エゴノキ、ウ

ツギ等々。ケヤキの大樹も一本欲しい。こんなおとき話のような想いに逃避することもあつたが、現実ははるかにきびしく手をつけるにも至らず消えてしまった。

創立二十五周年にあたり、井草の限りない発展を祈つてやまない。

サッカー・同数共学・いえだに

真田幸男

(第四代校長)



サッカーだけに限らないが、このごろのよう

に公式試合が多くなると、小石川と井草が

グラウンド顔を合わす機会も、ちょくちょく

ある。こんなことを書くと、小石川の関係者

に叱られるが、ついこの間まで、両校のサッ

カーラーを観戦している私の心中では、井草に勝

たせたいという気持が強く動くのを、自分で

もどうしようもなかつた。五中(現小石川

高)の出身で、かつて二十年も在籍した旧職員である上に現校長という私の心中であ

る。勝負事のひいきの感情だけは、理屈抜き

のもので、井草のサッカーを育てるのに夢中

だった十年前の気持が、いまだに私の心奥深く、燃え続いているものと見える。

昭和三十五年の創立二十年の記念式では、

私が現役校長で、もっぱら井草という学校の若さを強調して、三十にして立つというくらいだから、二十歳というのは、まだまだ這一

古いのうち、井草はこの若さを大事にしてゆ

こうという主旨の話をしたことをおぼえてい

る。その後、立川・小石川とかわって、なおさら井草の若さを懐しいものに思い出す。私

が赴任したのが、ちょうど井草が男女同数に踏み切った直後で、大いにわが意を得たことなので、私も同数同質共学論というのを、あちこちでブッて回った。一年生迎え入れの入学式の話から、付近の中学の進学説明会に招かれてのP.R.の話に至るまで、同じことを語っているうちに、話の体系のようなものがで上り、所々に交ぜるキャッチフレーズに至るまで、すっかり型ができて、今でもやろうと思えばやれる。あのころの在学生諸君は、何へんか同じ話を聞かされて、またかというので、さぞうんざりさせられたろう。

サッカーが強くなつたのは、中瀬をはじめ、下地のある地元の中学から好選手が入ってきたためで、私の奨励によるものではないが、それでも私自身がゲームの日にはしょっちゅう、グラウンドに出ていたことが、なにがしかの刺激にはなつたらう。昭和三十二年、宿敵教育附属や城北を破つて、静岡の国体に出場した時の感激は、いまだに忘れられない。あの時は、ほんとうに強いチームで、C.H.の早坂君を中心にして、井草サッカーの黄金時代だった。藤枝でも、山城高と当つて、たしか引分けの抽せん負だつたと記憶する。

豚小屋校舎といわれた、ひどいバラックが一棟残つていて、名物の春先きの強風が吹いて、教室の後の方がほこりで見えなくなつた。雨時に天井からいえだにが落ちて、女の先生の髪の毛や女子の生徒のスカートにたかつたりして大騒ぎとなり、全校大掃除をしたりし

たこともある。何もかも、未熟、未完成の井草だったが、その若い井草が、私にはたまらなく懐しい。二十五年になつた井草は、今、教室の後の方がほこりで見えなくなつた。というので、授業を半日で打ち切つたり、梅雨時に天井からいえだにが落ちて、女の先生の髪の毛や女子の生徒のスカートにたかつたりして大騒ぎとなり、全校大掃除をしたりし

たこともある。何もかも、未熟、未完成の井草だったが、その若い井草が、私にはたまらなく懐しい。二十五年になつた井草は、今、教室の後の方がほこりで見えなくなつた。というので、授業を半日で打ち切つたり、梅雨時に天井からいえだにが落ちて、女の先生の髪の毛や女子の生徒のスカートにたかつたりして大騒ぎとなり、全校大掃除をしたりし

井草の思い出



藤

(第五代校長)

茂

私が井草高校の校長に任命されたのは、昭和三十六年の四月で、昭和四十年の四月、現

和三十六年の四月で、昭和四十年の四月、現在の竹台高校に転任するまで、満四年間井草にお世話になりました。

この四年間は、ほんとにつづく間に過ぎ去つたというのが実感でした。私の東京に

後から振り返つてみると、結局何もできなかつたという悔悟の心一杯です。

生徒諸君も、素朴で素直な人が多く、われのいう事をよく聞いてくれるので、指導にも熱意がこもり、意欲をもつて、事に当たることができたと思う。

私の赴任した前年、すなむち昭和三十五年の十月に、創立二十周年記念式が開かれ、記念事業として、校内諸施設の整備がなされて、いたことは、助かったのですが、その記念事

業の一つとして、山荘の建設事業と、借入金の返済ということが残されていたので、その後始末をすることが私の使命の一つでもありました。

山荘の候補地として、山梨県の清里の八ヶ岳山麓が、中野工業、富士高校、荻窪高校と本校の四校が借地をしておりました。

この地を実地踏査した結果、冬は寒気が強いために、スキーハウスは不能であるばかりでなく、スケートも近くではできないこと、水も不足しており、交通も不便なので、再検討を要することを痛感し、それに山梨県側の要求もいろいろ出て来たので、慎重に他の候補地を求めており、資金の蓄積との両面から一とまことに、清里の地は放棄することに決定し、他の候補地を物色した結果、夏、冬ニシーブン利用できることと、バス一本で輸送可能な地で山荘としての適地として、三十八年から三十九年にかけて、長野県の小諸の隣地、湯の丸峠に決めたわけであります。

その事もさることながら、毎日勉学し、生活する校地内の環境の整備の必要性を痛感して、校舎の増改築に力を注いで来たのです。昭和十八年建築の校舎は、未だ老朽校舎、危険校舎の部類には入らない状態で、一

時はあきらめかけていたが、いろいろ陳情した効果があつて、三十八年度に理科関係の鉄筋校舎が建つようになり、翌年度は統合して、普通校舎八教室が四階建てで、特別教室と統合予定であったところ裏の住民から抗議がおこり、冬季日陰になることで、その計画が変更され、三階建てになり、その上、二米半南側にずらすことでの着手された。

練馬区は、文化的諸施設に恵まれていない

ので、水道、ガスを始めとして下水道等の諸施設も一日も早く改善して、少しでも快適な学校生活を送ることが出来るよう願念して、努力してみたが、この方は実現をみないまま、転任することになったのは遺憾でした。

井草高校も本年度、創立二十五周年を迎

られ、精々発展の一途を辿っていられるこ

とは誠に慶賀に堪えません。今後の発展と前進

をお祈りいたします。



二十五周年に寄せて



正一 部儀

(PTA会長)

東京都立井草高等学校が創立二十五周年を迎えるに当たり心からお祝い申し上げます。

元来歴史といふものは私達が先人の歩んだ道をつぶさに尋ね、これを科学的、体系的に分析し、究明することによつて、次代の指針者ともなり、後人の助言者ともなつてくれるものだと思います。その意味に於いて、ここに記念誌を編み、学校二十五春秋の歩みを辿る企画は、まことに意義深いことと存じます。思えば本校は昭和十六年四月東京府立第十八高等女学校として発足し、暗い戦時下に着々とその礎を築いたのであります。爾後昭和二十年第二次世界大戦敗退という日本歴史曾てない大きな荒波を受け、昭和二十五年には新学制改革に伴い、東京都立井草高等学校と改称し、男女共学校として再出発したのであります。この時期は占領政策下の教育行政のため、教育内容も、その方法も、相当の制約を受けたのですが、過去の因襲を断ち切り眞の民主教育樹立のために、文字通り血のにじむような忍苦と努力が続けられたのであります。そして今日、その努力と熱意が結実し開校当初、当局、並びに地域各位が本校に寄せられた期待が遺憾なく実現されて來たのであります。殊に本年は学校積年の念願であった山莊が長野県東部町湯の丸高原に竣工され、生徒の心身洗練の道場として開かれたのであります。

こうした素晴らしい発展、充実への過程は、教化に運営に惜しみなく、その心魂を注いで下された初代校長広瀬政次先生を初め、歴代校長、及び現校長を中心に行つて一丸となられたこと、又、建設への前進に貢献して下さいました諸先生方、更にP・T・A各会員、地域社会各位の御協力と御努力によるものと確信致します。P・T・A会長として深甚なる感謝と敬意とを表わす次第です。

このような恵まれた学園と環境に育まれる生徒諸君は、まことにその處を得て、各自の能力を遺憾なく發揮することが出来、よりよき社会造成の一員として活躍する立派な人材となり、井草高等学校の名声を限りなく高めてくれことと信じて疑いません。

最後にこの二十五周年を契機として本校が形、質、共に益々充実発展されますよう衷心より祈念してやみません。

定時制課程の沿革 堀部先生記

沿革史

- 昭和 30. 4. 1 第1学年を6学級として男女同数となる。
30. 10. 1 高柳一二校長退職し、都立多摩高等学校長真田幸男学校長に補せらる。
31. 7. 25 西校舎竣工 555m²
34. 4. 1 第1学年を7学級とする。
34. 4. 2 南校舎竣工 714m²
35. 7. 1 本館（図書館を含む）竣工。1,754m²
35. 9. 1 校旗制定
35. 10. 27 創立二十周年記念式举行。
36. 4. 1 真田幸男都立立川高等学校長に転補、都教育庁より藤井茂学校長に補せらる。
38. 4. 1 第1学年10学級募集。パイプ教室2教室を増設。
39. 3. 31 特別室（物、生、化）竣工。754m²
39. 4. 1 第1学年を9学級とする。
40. 3. 31 特別室180m²、普通教室（6）787m²竣工。
40. 4. 1 藤井茂都立竹台高等学校長に転補、都立昭和高等学校長前島壽一学校長に補せられる。
41. 3. 31 普通教室（3）270m²竣工。
41. 7. 5 長野県小県郡東部町大字新張字新張山に山莊竣工。「東京都立井草高等学校湯の丸 からまつ山莊」と命名。
41. 10. 29 創立二十五周年記念式举行。

昭和 23 年 3 月 31 日 東京都新制高等学校に定時制課程設置せらる。学校長杉山文雄。

昭和 23 年 3 月 31 日 広木富之介定時制課程主事を命ぜらる。

昭和 23 年 6 月 1 日 開校式並に入学式挙行。取毀された旧校舎にて授業を開始。

昭和 23 年 6 月 1 日 教室二教室。職員室は中央横廊下（三坪）を改造使用。

兼任講師五名委嘱す。

当初生徒數二十名なり。

昭和 26 年 3 月 18 日 第一回卒業式挙行、卒業生八名。

昭和 27 年 3 月 18 日 第二回卒業式挙行、卒業生十一名。

昭和 27 年 7 月 31 日 主事広木富之介退職。

昭和 27 年 8 月 1 日 本校教諭三橋秀郎定時制課程主事を命ぜらる。

昭和 27 年 10 月 1 日 学校長杉山文雄東京都立忍岡高等学校長に転補。

昭和 28 年 3 月 18 日 第三回卒業式挙行、卒業生十九名。

昭和 29 年 3 月 18 日 東京都立城北高等学校長高柳一二学校長に補せらる。

昭和 29 年 5 月 15 日 第四回卒業式挙行、卒業生三十三名。

昭和 30 年 3 月 10 日 職員室竣工、専任職員七名。

昭和 30 年 3 月 10 日 体育館兼講堂竣工、建物一七四坪 二階九坪

計一八三坪。

昭和 30 年 3 月 18 日 第五回卒業式挙行、卒業生三十四名。

昭和 30 年 9 月 30 日 校長高柳一二退職。

昭和 30 年 9 月 30 日 第五回卒業式挙行、卒業生三十四名。

- 昭和 16. 1. 27 東京府立第十八高等女学校設立認可。
16. 2. 4 広瀬政次校長に補せられ、東京府立高等家政学校内で開校準備。
16. 4. 5 中野区鷺宮5丁目383番地の仮校舎で開校。(第1学年5学級250名)
17. 1. 31 校名を東京府立井草高等女学校と改称。
18. 2. 2 練馬区上石神井1丁目40番地の本校舎(現東校舎)に移転。(敷地22,754m²)
18. 7. 1 都政実施により校名を東京都立井草高等女学校と改称。
20. 3. 28 第1回卒業式を行う。
21. 3. 31 杉山文雄校長に補せらる。
22. 3. 25 校舎増築平家建。(782m²)
23. 3. 31 東京都立井草新制高等学校設置(全日制第1学年5学級 定時制1学級)
24. 3. 21 高等学校第1回、高等女学校第5回、併設中学校第2回卒業式を行う。
これで高等女学校併設中学校はなくなる。
24. 4. 1 P T A 生徒会結成
25. 1. 28 校名を東京都立井草高等学校と改称。
25. 4. 11 男女共学第1回入学式を行なう。(5学級 男80名 女170名)
25. 10. 17 創立十周年記念式典挙行。
27. 10. 1 杉山文雄都立忍岡高等学校長に転補、都立城北高等学校長高柳一二学校長に補せらる。
30. 3. 10 体育館兼講堂竣工 605m²

昭和31年10月1日	東京都立多摩高等学校長真田幸男学校長に補せられる。
昭和32年3月25日	増築校舎(特別教室四教室)竣工。
昭和32年3月7日	第七回卒業式挙行、卒業生四十七名。
昭和32年5月9日	主事三橋秀郎都立板橋高等学校へ転任し都立主武咸丘高等学校教諭福田薰本校定時制課程主事を命ぜらる。
昭和33年3月18日	第八回卒業式挙行。卒業生五十名。
昭和34年4月8日	第九回卒業式挙行、卒業生四十三名。
昭和34年4月8日	南校舎一部竣工、教室移転。
昭和35年3月18日	第十回卒業式挙行、卒業生四十九名。
昭和35年6月20日	鉄筋三階建新校舎竣工職員室、教室等移転す。
昭和35年10月27日	創立二十周年式典。
昭和35年 昭和36年4月1日	「汐騒の詩」上演東京都第三位。
昭和36年4月1日	学校長真田幸男東京都立立川高等学校校長に転補。
昭和36年4月1日	教育庁より藤井茂学校長に補せらる。
昭和37年度	音楽部第三学区文化祭において第二位。
昭和37年度	卓球部第三学区で優勝。
昭和37年度	「息子たち」定時制中央大会東京都第一位。
昭和37年度	バレーボール部第三学区で優勝。
昭和37年度	N H K 「余暇の利用について」全国放送。
昭和37年度	「川の見える工場」定中央大会第三位。
昭和39年度	「かんかん地蔵」定中央大会第一位。
昭和40年度 4月1日	学校長藤井茂東京都立竹台高等学校校長に転補、都立昭和高等学校長前島壽一学校長に補せらる。
昭和41年2月	「日うちのナース達」関東大会第一位。



写真は、前列左から・岡垣先生・鈴木先生・前島先生・山本先生、
後列左から 大沢先生・近藤先生・築山君・蕪木君・沢君・山口さん。

特

集

懐旧座談会

—旧職員卒業生の語る井草25年の歩み—

司会 岡垣克己先生

卒 旧 学

澤 築 蕪	業	近 大 鈴	岡 前 校
木 生		澤 木 員	垣 島 側

正 俊 芳	ち 清 貞	克 壽
か		

信 一 郎	子 男 三	己 一
君 君 君	先 先 先	先 先

	生 生 生	生 生 生
--	-------	-------

編集 山本先生

速記 山口順子
(高校12回)

司会(岡垣) 昭和十六年の二月四日に創立されまして、ことしが二十五周年になるわけです。でことしの秋、十月の終りに二十五周年記念事業を予定しているわけです。それにつきまして古い先生方、卒業生の方に集まつていただきまして思い出をひとつ語ついただきたいと思います。

校長先生ごあいさつをお願いいたします。

前島(校長) どうもきょうはお暑いところ、またお忙がしいところわざわざおいでいただきましてほんとうにありがたく思つております。

いま司会者からお話をございましたように、昭和十六年といいますと、日中戦争、日華事変とか日支事変といつてますけれども、日中戦争の終り、やがて太平洋戦争に突入しようという非常に国家的にもたいへんな時期で、物資は不足するし若い人は兵隊にとられるし、いろいろなめにあった時代に、この学校が創立されて、そして太平洋戦争になり、二十一年に敗戦となつて、それからご承知の学制改革といふいろいろな道をたどつてきましたわけです。

昭和十六年に創立され本年で二十五年になりますので、四分の一世纪というひとつの折

り目でございますので、今までのご苦労を

しのんで、また先輩の方々のご苦心を伺つて、そしてこの二十五年を一つの節として将来の発展を期したいと思います。そういうわけで二十五周年の記念式をこの秋に行ないたいと思つております。

いろいろ考えましたけれども、いろいろな面でなかなか思うようにはいきませんけれども、学校関係者、卒業生、P.T.A.、旧職員の方々においていただきまして記念式を行ないお祝いをしていただきたいと思つております。

一口に二十五年といいますと長いようでもあり短いようでもあり、たつてみるともう二十五年たつたかということになりますが、感慨無量だと私は思つております。学校もだんだんと整備され生徒職員も多くなりまして、現在九学級、三学年ですから二十七学級千四百数十名の生徒を擁しております。職員も七十数名という、しかも定時制がございますので非常に規模としては大きな学校でございま

な歩みを続けています。

おかげさまでいろいろ学校の設備は整つてきましたが、一つは二十周年を期して山の寮を建設するという計画がおりになり、その後P.T.A.の物心両面のご援助によりまして、ちょうど二十五年を期しての山荘が落成いたしました。正式の名前は東京都立井草高等学校湯の丸からまつ山荘、略して「からまつ山荘」という名をつけました。先日落成式をあげ、第一回の林間学校を全日制、定期制とも行ないまして非常な成果をあげました。さらにこの数日前に昨年度の卒業生の父兄の方々全體にご案内を差し上げまして、そして約五十名の方々に参加していただいて一泊してもらいました。いろいろおほめの言葉をいただきましたが、不備なところもあらうと思ひますので、これを今後なおしていただきたいと思つております。

簡単でござりますけれども、一言初めのごあいさつにして、また後ほど色々と申し上げたいと思います。

司会 昭和十六年の二月四日に井草高等女学校として発足し、現在の東京都立井草高等学校となりいろいろな変化をしておりますけれども、順調な非常に正しいまつすぐが、鈴木先生、場所はどこにあつたんです

か。

—— 場所はいまの武藏ヶ丘（鷺の宮）いますっかり様子がかわってしまっているけれども、そこに確かバラックで井草、五商、武蔵ヶ丘、大泉、確かこの四校だったと思いまがね。バラックが一棟ずつあったわけなんです。（笑）当時からの先生は青山兵吉先生ただ一人、きょうはなんかお見えにならないそうですけれども、私は翌年に参ったわけで

たびたび申し上げるんですけども、初めて見に行つたときに、あまりにちっぽけな学校なんで帰っちゃおうと思つたんだですが、（笑）まあしかしまあまあ、と思いましていつた。それがいま前島先生がおっしゃるように、これだけの『大井草』に飛躍したということは全く感慨無量ですね。

司会 なんか特に印象のあるようなことはござりますか。

鈴木 いろいろあります、このごろぼけてしまいまして、（笑）とにかく初代校長が亡くなられました、広瀬先生で、教頭が二代校長の杉山先生、それからあと三橋先生その辺が幹部級、それと大体若い人が多かつたですけれども、亡くなられた隈先生が非

常に張りきつておられたもんです。青山さんなんかいたわけで、けつきよくわれわれ考えてみると二十代だったと思うんですね。自分じゃ一人前だつたつもりですけれども、おそらく七十七人の中だつたら尻のほうになつてしまつたろうが、一角の士のつもりでいたんですけれども、また広瀬先生というのはいまの時代から考えると、いまの若い人には受け入れにくくと思いますが、私はとにかく信念のあるりっぴな人だつたと思いますが、府立十八高女というものをりっぱに育てようともすごい意気にもえていたわけです。そして当時では優秀な女の子ばかりでしたね。いろいろ各方面に活躍しているけれども非常にかわいい女の子しかいなかつた。こういう連中しかいなかつた。そういう連中と特に印象に残っているのは授業も授業でしかれども、放課後一緒に遊んで遊び回つたことです。バレーボールをやつたり、バスケットをやつたり、走つたり、ころんだり、いろんなことをやりました。ああいう思い出はなんともいえないですね。（笑）

司会 十六年の十二月に戦争になつたわけですが、開校したときの授業は相当行き詰つたことでしょう。

鈴木 ええ、ほんとうのバラックでした。常にお張りきつておられたもんです。青山さんはその当時を知らないんです。私が赴任は戦争前にきまつていて、確かにそうだと思うんです。戦争になつちやうと一体どういうことになるのか、赴任できなくなるんじやないかと思つてましたが、（笑）しかし考へると行き詰まるというほどのものはなかつたですね。十八年十九年二十年までは割合にのんびりやつていたんですね。とにかく勉強そのものでした。英語は熱心にやつていましたね。私は那にいっちゃんで、英語はよその学校では廃止するという迎合的な措置がとられるのに英語はますます必要だと、やつてたといふことを聞いておりますけれどもね。

司会 広瀬先生は英語に熱心だつたと聞いておりますが、近藤先生なら広瀬先生を知つておられると思うんですが、それについて近藤先生ひとつ。

近藤 大へんこわい先生でございました。とっても一途な先生でいらっしゃいましたね、純粋みたいなところが……。

司会 十八年の二月三日にこの学校（現在の校舎）に移転しているわけですが、一年とちょっとは武藏ヶ丘ですね。

ね。そのパラックからこちらへ移って、いまここで最後の残骸になつてゐる建物が当時はさつそうと建つていたわけです。（笑）

近藤 あれしかございませんでしたね。

鈴木 そこはやぶだつたし、校庭はでこぼこだし、記憶に残つているのは鷺の宮から生徒と一緒に一人一人いすをとにかく持つてきましたね。みんな生徒と一緒にになって荷を運んだんですから。

司会 その移転が大へんだったと聞くんですがね。

鈴木 いまの子供にそんなことをしろといつたらおこつちやうかもしませんけれども、とにかくやりましたね。小さい中学生だからね、それが体の半分くらいあるいすを持つて運んだ。要するに、それは当時の世相もあるけれども、広瀬校長の影響がかなりあつたと思いますね。

とにかく率先垂範という言葉がはやつた。

駅へ降りて前向きに何十度かで（笑）わきめもふらずにきますんで、毎日朝礼があつて、先生がおくれてくると大へんどうやされた。われわれは校長が通ると早足でいき大いそぎでかけ抜け抜けていったもんですね。

近藤 なにしろ音楽室のピアノを大八車に

のせて阿佐ヶ谷からひいていらしたなんでもの。

司会 歩いて運んだんですか。

近藤 あのころ小使いさんの石森さんと、ほんとうにびっくりしましたわ。（笑）

鈴木 輸送機関はリヤカーくらいで、大ていなものはみんな歩いて運んだんですね。

司会 十八年の二月にここへきたわけですね。動員生活、その辺の思い出をひとつ近藤先生語つていただきたいんですが。

近藤 私は朝日奈。柳沢にございましたが、中島の方と二つに分かれおりましたが、中島のほうには私、歌を歌いにいつておりました。専属としては朝日奈でございました。西武柳沢ですか、いまはどういうふうになつておりますか。

鈴木 私は十九年の二月にここをサヨナラしまして支那へいっちゃつたんですが、四月からですね動員は、もう少しあとですか。

近藤 七月ころからじやないですか。

司会 十九年の半ば過ぎから……。

近藤 一学期ですか、〇〇〇を教えたよう

鈴木 爆弾なんかずいぶん落ちたんです

近藤 爆弾が落ちたのは朝日奈のほうで、うちの生徒は一人も犠牲者がおりませんでし

たが、隣のほうに落ちて人工呼吸したこと

司会 動員生活の生徒はどうでしたかね。

近藤 とっても一生懸命で夜中に起きて、十二時に起きて交代するんです。（難聴）空襲がひどくなりましてからずいぶんひどい目にあいました。想像もおつきにならないでしょう。

鈴木 少しは仕事が終つたあとで勉強みたいたことをやつたんですけど。なんかそういう話を聞かないんですけど。

近藤 立ちっぱなしで疲れてしまりますでしょ。

鈴木 （難聴）やはり工場なんかで先生ががんばったというような話も聞きましたがね、これだけ働かして生徒にろくなもの食わせない。大野さんや生野さんはずいぶんがんばつたそうですよ。あの調子で。これだけ働いてこれしか食わせないのかといつてずいぶんおこつたそうですよ。その当時そんなことをいつたら大へんだったんですよ。

があります。

司会 二十年の八月十五日終戦になつたわけです。それから二十三年の三月に新制高校が発足したわけですが、その新制高校になつて間もなく男女共学になつたわけですね。このころ高女の時代の井草の生徒と現在と比較していろいろ聞くわけですがね。近藤先生高女時代の井草の生徒というのはどういう印象がありますか。

近藤 皆さん優秀でしたね、とっても。

鈴木 とにかくそのころの第五女学校（いまの富士）か井草か、井草か富士かといわれていたんです。皆さんよくできるんだ。それいまの人はできないというわけじゃないけれども、（笑）ほんとうにバッくひらめきがあつたね。

鈴木 数が少なかつたんじゃないですか。

近藤 私が参りましたときは三学級でした。

司会 こういわれるを得ないんじやないです。

築山 （難聴）高女時代のおほめの……

鈴木 それを認めざるを得ない、と。それだけまた優秀な人ばかりしか学校にこられ

なかつたんじゃないですか。

鈴木 ある程度限られていましたね。

築山 ある程度いまのあれより自分たち自身にもなんかエリートみたいな意識があつたんじゃないですか。少しばんじやないですか。

司会 井草の卒業生で映画やテレビで一応名前のしれている人がありますか。

鈴木 シャープさんフラットさんのお琴にミキシマ（古ヤヨシエ）というのが出ているね、

近藤 二十五年でしたかしら。アナウンサーなんかしていらっしゃる人がありますね。カタオカさんですか。の方はやっぱり主人もアナウンサーなんですね。

司会 高橋和枝さんもそうでしたね。

鈴木 あれは中退しちゃつたんだ。あれもおもしろい子ですね。

大沢 大映にいた小林チヨさんなんかも……

鈴木 最近、栗原さんが味の素の宣伝を盛んにやつたけれども。

司会 それから二十五年の四月に男女共学になつたんですが、そのころのいろいろ思い出について大沢先生……。

大沢 実はね。私がきて最初に受け持つた

のが鈴木先生のあとだつたらしい。なんかいろいろ整理されたあとだつたらしく、どうも迷惑をかけたんですが。

鈴木 ゲストメンバーだね。

大沢 初めて担任をやれというのが、鈴木先生がお膳だして下さって、二年と三年と受け持ち、その連中が二十六年に卒業したわけですが、なんか気構というものがありませんよね。なんかちょっといわれたりすると、

なにくそという激しいものをもつていましたね。そのあとに入ってきた連中がなんと無試験で入ってきた学年らしんですよ。

近藤 あのときだけ無試験だったわ。

大沢 それで改めて入学試験をやりなおしててくれといいましたよ。なんか自分たちが無試験ということに大きな反発を感じていたんじゃないんですか。

司会 三十年の四月に男女共学、男女同数にしたわけです。それまでいろいろ、たとえばホーメルームで男子の数が少ないので採決に困ったとか、（難聴）杉山先生が男子を集めてお説教をした。男女共学の講義になればいいからいろいろ思い出があったと思うんですね。

鈴木 なしろ旧女子系には男子がばらばらになつたわけですね。それまでいろいろ、たとえ

らで、やはり最初に入ってくる男子は英雄なんだけれども、好んで入ってきたわけじやないですが、正直のところまあ人はいいんだけれども、気の弱い男の子ばかりだったんですね。その生徒会の規約なんかみんな女の子がつくっていたわけでぱりぱりやつたわけです。

そこへ男子が入ってきて女子の生徒会長では工合いが悪いというので男子を生徒会長にさせた。たしか男で初めて生徒会長になったのは黒木だと思うんだが、黒木があいさつできなきんでよ。 (笑) 大野さんなんかが文章を教えても (笑) 彼はみんなの前に立つとがたがたふるえて絶句しちやつてね、あとは出てこない。(笑) いい意味で非常に純情な正直なとにかく成績はたなあげして人間的にはみんない子ばかりだったね。その黒木なんか放送局に活躍しているそなだが:

この辺にもうひとつ旧造のパラック校舎があつたんだ。戦後の建物だからひどいものなんだ。それを男の子たちが年中破壊行為をするものだから、非常におこったんだが (笑) 猫小屋校舎なんていっていたね。

築山 僕らが入ったときにこわしたんですよ。

鈴木 私はその校舎をよく知っています

近藤 杉山先生は苦労しておつくりになつたんでご自慢だったわね。

(19)

いつ食べちゃうんですね。女子と一緒に食べられないんですね。

司会 杉山先生なんかは……。

鈴木 杉山先生は男子を入れたくなかったんだらうが、全体的に入れたんだから、その意味では杉山先生はちょっと古くなっちゃつたね。

運動場なんかなかつたんですね。

鈴木 運動場はでこぼこでやぶやなんかあって、女生徒はくわをふるつてざさの根を取つたり捨てたりだんだんならしていった。実際に使えるようになつたのはいつか忘れました。失対事業で人夫が入つて、それまでは広いことは広いけれども、大へんな運動場だった。運動場の広さでは申し分なかつたんだけれども、やはり体育館がほしいというのは生徒と先生の希望だったね。

近藤 音楽室もありませんでした。

鈴木 十周年記念のときに青空でやつたわけです。で、広瀬先生から十年にもなるのに講堂ひとつないとはなしにごとだというおしかりがあつたわけです。杉山先生はだいぶ頭にきてけつきよく杉山先生のときはとうとうそれはできなかつた。三代高柳校長のときにはそれができたんだね。

朝礼のときに生徒全員廊下に並んで、いま社会科の室になつてある裏側、そこへいっぽいに先生と生徒が集まつてなかなか校長は大へんただ首をあつちに向けたり、こっちに向けたり、(笑) そういう時代があつたわけです。それからこっちができるから中庭で杉山先生なんか中庭でやつてたわけです。雨が降ると朝礼中止。(笑)

鈴木 人生といふものは楽しいものだね。

大沢 二十八年の初め担任に赴任をして一年やつてまた三年やれといふんですよ。確か二十八年の第一回卒生はそれが愉快なんですよ。お屋休みにいないんですね。表にいきますと十何人が男子が並んで入つてくる。表へ

鈴木 九州の放送局で。

近藤 杉山先生は苦労しておつくりになつたんでご自慢だったわね。

司会 体育館が竣工するまでに講堂といふものはなかつたんですか、新校舎をつくるまでいろいろ苦労したんじやないですか。

鈴木 でも昔あれしかなかつたときには、二十八年の第一回卒生はそれが愉快なんですよ。お屋休みにいないんですね。表にいきますと十何人が男子が並んで入つてくる。表へ

鈴木 話が戻るけれども、蕪木君は九州から転校してきたんだが、どういう印象でした

か。

藤木 お話を伺つてみますと、きょう初めでお聞きしたんですねけれども、二十五年の四月から男女共学で……。

司会 三十年に男女同数になる前にきているわけだから君は男女同数になつたんだね。だから君は男女同数になる前にきているわけです。

藤木 私ははつきり申し上げて下さいぶんひどい高校があつたもんだと思いましたね。私自身は家庭の事情できたもんですからあつたですけれども、私田舎の旧制の中学ですから、講堂は二つもあるし体育館も全部そろつてあるし、野球場もあるし運動場もあるし化学室はあるし、設備も整つていてたところから、教育はきびしかつたですから、私はなにも勉強しないでおかげ様で入れた。

一回弁論大会で話したことがあるんですが、皆の考え方がニヒリズム的な、ちょっとにしてる男性が女子に圧迫されている。(笑)だから男性は違慮がちだつたという、そういうところはあつたですね。でも勉強はみんな一生懸命やつたと思いますね。個々には相当優秀な方もいらっしゃつたと思います。それからだんだん出てくると思うんだけれども、

よく勉強はしてたですね。ただ、学校における男子生徒はいろいろ苦汁を飲んでいたといふか、そうした時代じゃなかつたというか、そうした時代じゃなかつたですか。これ

は鈴木先生がおっしゃられたあれから考へると、男女共学というところの最初の高校だから仕方がないですね。

男子高の中の女子はそれほどでもないが、女子高の中の男子は抵抗を感じるね。

近藤 なにしる音楽の時間には男子が三人しかいないんですから授業にならないんですけど。全然いなければいいんですけども。三人の男子を一生懸命たてて大へん苦労しましたわ。

藤木 近藤先生なんか一番困らせられたんじゃないですか。

司会 二十六年の十月に創立十周年式をやつたんですが、鈴木先生、亡くなられた限先生の印象の強い、この辺の思い出をひとつ。

鈴木 さつき申し上げたけれども、十周年といつても設備の点ではなにもなかつたわけだから設備は悪いけれども、われわれは一生懸命やってるという自信は先生方にみんなあつたと思うんですけれども、限さんのことについていろいろ思い出はあるけれども、お

もしろい先生でしたね。

英語の授業なんか、僕最初にびっくりしたのはとにかくこっちが授業をしているとじやまになるくらいとにかく大きい声でしたね。

司会 いろいろ思い出のある先生でした。

吉川 先生もそうですが、限先生は遠くでやられておってもよくわかるんだね。それから歌が得意だったね。「赤城の子守歌」(笑)

それから……。

近藤 浪花節とか義太夫とか。

鈴木 義太夫のどうするどうするなんてね。その辺は生徒は知らないだろうが、旅行なんかいってやつてたんじゃないですか。「赤城の子守歌」は聞かせたんじゃないですか。

か。

司会 広沢限造といつて広沢虎造の……。

鈴木 弁当が大きくて早めしなのは驚いたね。あつという間に食べちゃつて、さあやううなんてバレーに出てくる。(笑)生徒と同じですよ。腰にきたない手ぬぐいをぶら下げたね。(笑)

藤木 限先生は非常にみんながあれした先

生ですね。きょういらしてない守屋さんなんかも二言目には「隈先生」と出でますね。

司会 亡くなられましたのはいつでしたかね。

篠山 僕たちが、在校中でしたね。病気というのを聞いた。

近藤 三十五年か六年くらいですね。

司会 痴で亡くなられました。

沢 横も告別式にいったから。
司会 三十年の三月に体育館兼講堂が竣工したわけですが、これについて思い出があるわけです。鈴木先生なんか一番苦労があったと思うんですが。

鈴木 責任重大なんです。けっきょくかいつまんで申し上げると、職員生徒の要望といふことで高柳校長が建設に踏み切ったんだが都がやつてくれない、PTAにお願いせざるを得ない。体育館兼講堂建設後援会というようなものをつくって金をためてやつたわけです。そして相当たまつたところで金額のまらないんだけれども、なんかそんなものを使つたりなんかして、父兄から日の出貯金を募集してそれを担保にして銀行から金を借りるというしきりで始めたんですが、順調にいけば問題はなかつたんですが、その講堂を請負つた

小崎社長がとんでもないやつで、いまでも忘れないんですが、教育のための施設でござりますから、ほかの仕事をさしおいても全力を傾倒して……。なんといううまいことをいうんでひつかかっちゃつた(笑)。で、柱が何本かたつたところでストップしちゃつたわけなんだが……。倒産寸前だったんですね。それを都の議員が推選したんです。ひどいやつだと思うんですがね。しかも普通ならば工事

というものが相当進んでから何がしかを払うのに先払いだった。で、技師の査定でこのくらいできているいるから百万円払え、もう百円払えという調子で、ところがわれわれしろうとでも、どうも払い方が早過ぎるんじやないかと思われたんだが、建設過程からみてそういうんばかり払い込んだ。でき上がりならないかと思われたんだが、建設過程からみていうちにつぶれちゃつてできない。こういうめにあつた。それから高柳先生は薄かつた髪がますます薄くなっちゃつた。で、弁護士さんを頼むというよなことになつて弁護士の司会 これは鈴木先生、隈先生、校長先生あたりでおさえたんですね。一般的の先生も迷惑をこうむれたわけですが、真夜中まで職員会議で夜おそく帰つた、と。大沢先生なん

鈴木 社長か専務が第二会社をつくって続するからやらせてくれといつてさらに金を引き出そうとしたわけです。途中でかかるわけにいかないでだましましやつていた。

かなりのところまでいったんです。ところがそれで予算を使いきつてあるところをなおかつた。(笑)これはいい気持だった。途中で忘れちやつたけれども、向こうで講堂を占拠するようなことがあった。これを裁判所命令で排除したということで、ひたたくりが出ていない。そこで若林、大沢、横田さんと若手を招集して(笑)ちょうどモ隊を排除する警察みたいにして出してしまつた。そういうひとこまがありました。向こうの専務かなんかがどなりこんできて校長室の外でばかやろう呼ばわりされたこともありました。

大沢 金集めにね。毎月百円、百五十円と

個人個人の表ができておりまして、できるまで続けたんだから。

鈴木 生徒諸君にすればいつまでたってもできないから、金出すのはいやだなんてね。無理もないんです。一年半くらいかかるからって、もっと早目にできて卒業式がそこでできることははずだった。

藤木 私のときにはかるうじでそこを使つてやられて、いただいて卒業したんです。普段は使えない。なにしろほとんど使えないからですね。日の出賃金をしましてね、しばらくの間雨ざらしにしてましたね。

鈴木 いまはよくみえないが、その当時としては血と汗の結晶でしたよ。

司会 それで三十八年の七月に本館が完成したわけですが、これでやっとバラック校舎の取りこわし、新しい校舎になったわけです。それでそのときにいわゆる二十周年記念で山荘建設問題が起つたわけです。そこで初め山荘の候補地に山梨県の清里を候補地として獲得したわけですが、建設計画を進めておつたんです。いろいろのことがあつていつこはなかどらないで、山梨県とはうるさいことがあっていいようどうしようかということで、前の校長先生、藤井先生のときに決断を

迫まられて放棄するということになつたわけです。しかし山荘建設は清里は放棄しても計画しようということで、そこで私が別の候補地を探して山荘を建設しようということになつたんです。これからあと私はちょっと候補地の決定に奔走するわけですがね。いろいろ探して白馬、それから磐梯山の麓、いまの湯の丸、それを候補地にしほつたわけです。どれにしようかと、磐梯山の麓がだいぶ場所がよさそうだが距離的な関係であきらめて、最後に現在の山荘湯の丸に場所を決定したわけです。そうしてそれから土地を獲得する上にうるさい経過はあつたんですが、今年の七月にやつと山荘が落成したわけです。で、この山荘を落成するためにはいろいろ苦心談があつたんですが、竣工するまでの建築上の苦心談、これはいまの前島校長先生がご心配をいただいておりますので、山荘建設の思い出を前島先生からひとつお願ひしたいと思います。

前島 簡単に湯の丸の山荘、いわゆるからまつ山荘につきまして概略申し上げます。

この建設につきましては、その当時の真田校長先生が発案をされ、藤井校長先生の代になつてPTAのご協力によってできたわけ

で、決して私や磯部現PTA会長関係職員の力だけではないんです。去年、私四月一日にはからずもこちらにござつかりになつて、さっそく伺つたのが長野県東部町の湯の丸高原というところに山荘をつくるという計画ですが、残念なことに私長野県人でございますが、湯の丸なんていうところがあつたのかなあと思つたくらいですが、いつてみるとこれが、湯の丸なんていうところがあつたのかなあと思つたくらいですが、いつてみるとこれはずばらしいところでして。簡単に申しますと浅間山の西北、菅平との中間にあり、大体見当もおつきになると思いますが、そういう位置にありますと、標高一千七百メートル余、道筋は信越線で参りますと、小諸で降りましてバスに乘ります。湯の丸行き、上田からも出ます。しかし一日に二便か三便しかありませんので、時間をみていかないと相当待ちますが、まあそういう場所にありますて、信越線の方から参りますと、小諸から約五十分でできます。それから群馬県の方から参りますと、ご承知の鹿沢温泉、スキーで有名な鹿沢温泉をずっとのぼつていって頂上がかりで、非常に色があざやかで、牧場があり

まして牛が草を食んでおりました。スキーのリフトもありまして、高級者向けのリフトもございます。それから現在は初心者向けのゲレンデもつくつておりまして、上級下級のスキーモデルができるというわけで、けつきょく一年中つかえるということです。

で、場所はそういうところですけれども、

国有林で上田の営林署の所轄に入っておりますので、まずPTA会長さん、宇井先生と一緒に営林署へいきまして許可を得ました。大体六百坪（一九八〇平方メートル）、国有林で上信越高原国立公園の中に入っております。建物は簡単に申しますと木造二階建で百十四坪で、それに三・三かければ平方メートルが出来ますが、百十四坪の建物で総工費概算で七百五十万円で入札いたしましたが、これは慎重を期しまして八つの業者を選定しまして、信用度と実績とを調査して八つの業者を校長室へ集めまして、入札させたわけです。そして最高もとらず最低もとらずその次といふところをねらいまして、しかも東京の業者ではあの土地の土地がらを知りませんから、地元の業者がよからうということで、けつきょく八つの会社の中から地元の二社が出ました。二社のうちから信用のある、熱心な宮島

組というのを選びました。七百五十万円くらいの建築費ですから坪当たり非常に単価も安いし、地元ですから材木はたくさんございます。営林署から大体六百坪、年一万五、六千円で土地を借りることにしました。そういうわけで、しかもPTAの会長さんが建設会社の社長でございまして、非常に目のある方ですから宮島組としては油断はできません。いい材料で非常に堅固なしかも洒落た建物になりましたと思つております。

いわゆる山荘といいますとやぼつたいといふ感覚がござりますけれども、丈夫でありしかも洗練されたという目的で建てました。それから寝具はりっぱなものを六十五組みつくりました。これはPTAの関係の方で利益を度外視してやってくれるという方にお願いしました。それから備品什器につきましては伊勢丹に注文しました。すべて明朗に、その間いろいろなことがあっては困りますので、

現在生徒諸君は一泊三食付きで五百五十円ということになつております。それから夏休み過ぎましてからもう少し検討いたしますけれども、一応いまのところは直接の関係者は五百五十円で三食という考え方をもつております。

会長さんのお知り合いで、しかもデパートにおさめている本元の業者に注文しました。そしてデパートに納めるよりももと安い費用を入れてもらいました。要するに信用のある業者だけを選んで造りました。これは皆様方のおかげでございまして大へんうれしく思つております。

先ほどちょっとお話をありました寄付行為ですが、今まで五年間つんでいただきまして大へんありがたく思つておりますけれども、去年の十二月に一応期限が切れましたので、そこで一応東京都へも完成の届けを出しまして、その後は今までどおりPTAの臨時会費としてちょうどいいいたして今後の運営、維持管理費というものにあてたいと思っておりますので、どのくらいといいましても何年かわかりませんけれども、なるべく早い機会にそれも打ち切つて、できたら独立採算でいいばよいかと思っております。

現在生徒諸君は一泊三食付きで五百五十円ということになつております。それから夏休み過ぎましてからもう少し検討いたしますけれども、一応いまのところは直接の関係者は五百五十円で三食という考え方をもつております。

この間 P.T.A. の方々をご案内しまして、鈴木先生にも P.T.A. ということでおらんいただいましたが、皆さんみな満足しておられたようです。今後学校行事が優先しますが、卒業生の皆さんももちろんのこと、P.T.A.、教職員、現在の生徒が有効に使って頂きたいと思っています。

司会 湯の丸には、こういう山荘で芝浦工大と井草だけなんです。目下敷地が決定して地鎮祭を行った学校はあります、現在のところは以上二校しかありません。

先日父兄の代表で鈴木先生がおい出になりましたが、どうですかご印象は。

鈴木 山荘はお話をありましたような真田校長のときについたんですが、清里もつたんですが、あそこは水がないし、そういうよなことと山梨県のやり方がきたないということでやめたんだが、伺つてびっくりした、すばらしい。ロッジくらいのものを想像していました。豊なんか最上品でおれのところなんかよりずっといいよね、ほんとうに感心したし感激しましたね。

鈴木 へんな話ですけれども、そういう願いを出すとどこでも許してくれるということじゃないでしょ。

たとえば井草はこういうところを選んでやりたいと、長野県と交渉するわけですか。敷地をまずあれる、長野県なら長野県の県庁のほうと交渉するわけですか。

司会 土地の所有者と、井草の場合は国有

地営林署との交渉、土地の選定というのがむずかしいね。けっきょく清里の場合でも、鈴木先生のお話をのように水が悪かったんで困つたんだ。それから今度場所がきまつてから、冬スキーやがれかつ危険でない、そういうふた今度湯の丸の場合は営林署の土地の獲得の交渉が一番手間どつた。

鈴木 維持管理がこれまた大へんだ。普段あけておいたりするためには管理人が必要でしょ。

いまのところは夏場ですけれども冬の設備をしなければならない。校長先生頭がいたいでしょ、そうでしょう(笑)。

鈴木 管理人は一人くらいですか。當時

に。そういう場合にそういう人がやめたあと

の退職金の問題とかそういう問題はどうなんですか。

実は私の会社で山荘という計画が出ている

わけです。そんなもんだから参考に聞きたくと思って……。

鈴木 やっぱり先の先まで考えて維持できるかという……。

沢 一年間使用できるんですか。たとえば卒業した場合、十月にいきたいと許可を出せばいいけるわけですか。

司会 事務の手続きが……。

近藤 雪は深いんですね。

前島 メートルから二メートルですね。

司会 いい場所です。スキーにもいいし春

はつつじがいいし。

鈴木 スキーができるし、そういう点では夏はだいぶ涼しいそうですね。

前島 朝夕は寒いくらいですね。

鈴木 からまつ山荘とはよくつけた、いいですね。

司会 そこで今度は卒業生諸君に学生時代

の井草の思い出を語ってもらいたいんです

が、たとえば授業の時の印象のある先生のこと

と、それから旅行かなんかの思い出を。

鈴木 私はまた印象の多い先生ばかりなんですが、私自身田舎から出てきたばかりなんですが、大沢先生を目の前にしてお話しするのも大へんあれなんですが、朝早くから源氏物

語をひもといいていただいたりして、ほんとう

に先生方がものすごく熱意をもつていらっしゃいましたね、そういう点でやっぱり感謝していますね。

それから私の担任の横田先生なんかも終つてから英語をやつたり、やはりそんなことで

先生方が非常に熱心でしたね。比較的若い先生が多かつたというか、まあ一番先生として

油ののつた時期の先生が多かつたようにお見受けしたですね。

司会 築山君は、築山 井草の歴史を聞いていますと、井草の創立のときに生まれたんで、僕らと井草と一緒に大きくなつたという感じですね。男女の数が三年まで全部同じになつた年なん

す。ほんとうの男女共学の時代を僕ら三年間過ごしたわけです。 真田先生のいらしたまん中の三年間ですか

ら、真田先生の影響を受けているのが僕たちだと思います。非常に自由なとき、フォーメーションの一番盛んな時期じゃなかつたかと思うんです。私の一番楽しい時期を過ごしたという感じだね。

司会 沢君は何年度卒業。 大沢 先生の担任なんできょうはあまた

りしゃべれないんです。(笑)

僕はちょうどこの校舎もできてなかつたし、古い校舎がありました。テニスコートの向こうのいまのハンドボールかなんかやつたあつちの方へいって食事をし、昼休みに向こ

うのやぶの方で食事をしたりしました。僕が学校へきたときは非常になんといいますか、

学校自明るい学校でした。すごく男の人が

女性の人と仲がよくてびっくりしました。僕は新宿だったもんですから、そういう点ではへ

んなムードがあつたんですよ。この高校にきたときにすごくびっくりしました。大人でもできないけれど、井草高校というのは男女の仲がうまくいってる、そういう明るいムードの学校でしたね。

司会 おほめにあずかって……。旅行とかなんかで思い出はないですか。

築山 大沢先生と一緒にでしたけれども、林

間学校というんですか、上高地へ毎年いつて二年目のときはすごい雨で、夜中に引っ越しことがありましたね。

澤 僕のところ、一番なんというんですか、たという感じだね。

司会 沢君は何年度卒業。 大沢 先生の担任なんできょうはあまた

司会 築山君のクラブ時代は。

築山 サッカーが国体に出ましたし、女子のハンドボールも出ました。僕らのときできたクラブ、プラスバンド、山岳部が僕らの時代にできたことですね。

近藤 いまでもご招待いただくよ、会があると。

司会 なんか印象に残ってる先生の授業は。

澤 やっぱり大沢先生ですね、印象に残つてますのは、大沢先生の授業はほんとうにきびしかつたですね。「消防自動車」というあだなで、消防自動車というのは火事が消えたら帰るもんだと思うのに、ベルがなつてもお帰りにならないんですね。(笑)

築山 顔をあげるさされるし。

鈴木 授業を楽しんでいたし、授業一筋に生きていなれ。

築山 五十点なんてとれなかつたよな。

蕪木 それは勉強しなかつたからじやないかな。(笑)

蕪木 試験のべらぼうにむずかしい。

近藤 大沢先生はよかったです、実力がつい題も多かつたですね、安保だとか。

澤 実力のつくようなやり方ですね。

前島 私も若いときにはだなが「消防自動車」だった。イットイズで始まつて終りのベルが鳴つたら、アドッグは打切り、ハイこれまで。（笑）

鈴木 生野先生も早かつたね、エーといつてベルが鳴るとそれで終るんだから。（笑）

前島 ほかの授業に迷惑になりますからきちんとやるべきです。次の時間が体育の場合だつたら着物を着替へなければならないから。

沢 大沢先生の場合は次がお屋の時間だから次回の授業に迷惑をかけるということはないからです。

あと松原先生という方、すごく最初の印象が強かったです。おつかない顔をしてすごい大きな声でした。

蕪木 先生の思い出といえば吉川先生の数学の授業は音楽を聞いていた感じがされたですね。

近藤 あの先生はイントネーションがあるんですね。すばらしいバリトンで。

蕪木 あの先生は女子にもてたからね。（笑）

司会 それでは最後に井草の将来の抱負について校長先生のお話を伺ってこの会を

終らせていただきたいと思います。

前島 卒業生の方、旧職員の方、PTAの方

のご苦心によりまして、今まで二十五年間歩んできましたことは私はほんとうにうれしくあります。私はほんとうにうれしくありますがたく思つておりますが、今後の問題につきまして、一つは教育面におきまして、一つは施設面において私の夢を描いてもう一つは施設面において私の夢を描いております。一つは教育面におきましては、ご承知の学校群というのがきましたので、

本校との組み合わせは大泉、石神井、井草といふことになりました。これは大泉、石神井は昔の男子系、本校は女子系ということで、

今日までいろいろとやかくいわれてきましたけれども、学校群になつたのでひとつ緊縛一番よそに負けないよう、教育方針、教育課程などを考えなおさなければならぬかと思ひます。

こういうわけで、私、去年赴任して以来一生懸命努力してきましたけれども、本校は毎年、毎年改築をやつておりますので、ことしはちょっとがまんしてくれということになりました。

私の学校も改築、古い校舎を全部改築してもらうことになつてしまつましたが、教育庁では計画しておりますが、私も図面をみせてもらつたんですね。それでも、予算の都合で、一年待つてくれとのことでした。本年はストップとなりました。しかし本校のたてまえとしておりました。しかし本校のたてまえとして、二十五周年を期して来年度こそは古い校舎をこわして、そして新しい鉄筋をつくつてもらうようにこれからもいまもそうですが、努力

になった以上は、これはよく考へないと大へんなことになると思います。

そういう意味で一応今度は校風を慕つてくるということにはいきませんけれども、そのかわり二十五周年を期して、スタートラインについてこれから出発するという意気込みでないと、本校はおき去りにされると思います。それが一つと、施設面においても大泉は古いぼろ校舎を相当かかえておりますし、石神井でもまだ少し残つております。本校は半分は残つております。

いたしたいと思つております。

それから先ほどお話に出ました体育館、これは非常に貴重な体育館でして、その当時 P.T.A.で建てるしかなかったんですが、先ほど

鈴木先生お話をのようにご苦心があつたんで、体育館兼講堂はその当時としては模範的体育館兼講堂で私はここへ見学にきたこともありました。そういう体育館ですから大事に使つていますけれども、まあその当時の規模と現在のとは違いますので、あるがゆえにつくつてやらんじや困るので、せっかくのP.T.A.の方々のご寄付による体育館も時間がきてこれをとりこわして新しい体育館をつくつてもらうよう教育庁にお願いしています。

それからもう一つにはプールをつくつても

らいたいと思って、教育庁へもお願ひしてい

ます。皆さんご存知かどうか知りませんけれども、まだ土地の問題がございまして、向こ

うの隅の六百坪は借地なんです。これは個人から借りておりまして、これは去年以来もめ

続けていまして、地主は返せとい、私どもは生徒がこんなに多いんだから困るといういきさつがございましたが、ようやくいまのところは現状でいきますが、将来は教育庁でも買つてくれるといっております。ただ所有主

が売つてくれればいいんですけども、役所で買つてくれるというので大いにお願いして、このままよりも少くはしたくないと思っております。そんなわけで教育面においても施設面においても二十五年を期して、さらにいつそうの発展をとげたいと私考えておりますので、この点につきましても旧職員の先生方はもちろ

んですけれども、ひとつ皆さん方卒業生、P.T.A.の方にはよろしくご協力いただきまして、仕事をやり易いようにお願いいたしたいと思っております。
司会 どうもぎょうはお忙しいところありがとうございました。これで終らせていただ

がとうございました。がとうございました。
司会 どうもぎょうはお忙しいところあり

て、仕事をやり易いようにお願いいたしました。これで終らせていただ

きます。

定 時 制 今 昔 物 語



福 田

(定時制主事)

先日、定期制発足（昭和二十三年三月三十日設置）当時のP.T.A.収支決算書を見た

ら、大変楽しかった。

そんな時である。

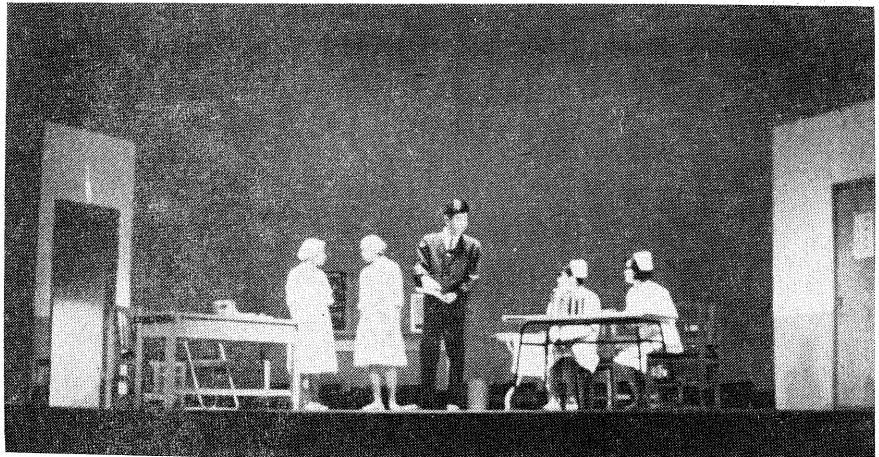
食糧も足りない、家もない、上野の地下道、上野の山には浮浪者がいっぱいいた。

後援会という名目で総予算三万円ばかりが計上されている。

その中で、雑費の支出を見ると、もうそく

らうそくがP.T.A.決算書に可成のウェイトをしめても仕方がない。

いったい、電灯が有るのに何故、ろうそくなんかと思うだろ。



昭和40年度・都中央大会第1位・福岡薫作「うちのナース達」は、関東大会でも優勝、文部大臣賞も獲得した。写真はその舞台面。

▷ 定時制の学園生活の近況 ◇

卒業旅行・昭和41年3月25日・四国高松の栗林公園で。中央に前島校長・堀部の両先生、後方右よりに福田主事先生の顔がみえる。



そのころの照明事情は本当にひどいものだった。一教室に百ワットが六灯、それが全部ついていた時は殆んどない。

その幽かな電灯さえ、チョイトイ故障でいかなかつたのだからひどい話である。

その度に、百瓦ろうそくが、威力を發揮したのである。

情ない話である。

それから後も、照明はあまりよくはならなかつた。どういうものか故障が多く、しょっちゅう停電になつた。

関東配電に電話すると、なかなか来てもらえず、みんなでむやみに腹を立てた。

三十三年に螢光灯を買ひ込んだ。

その時の生徒達の晴れ晴れした顔は今でも忘れられない。

校舎の中がそんな様子だから、校庭にまで照明に手の届くはずがない。

現在だつて教室の中はまあまあだけれど、廊下、便所、校庭、講堂は、まったく情ない。

都の照明予算が、いつかは本校にもまわつて来ると思うけれど、何年先の事がわからぬ。

一昨年の卒業生は学校への記念品を、校庭の照明にしようという事になつて、既に二対の

照明灯がバレー場にたつてゐる。何年かたつたら庭球コートの周囲にもたつ事になつてゐる。

とにかくなければ、仕事が始まらないのである。

校舎も、最初は現在の本館の位置にあつた平屋のパラックで、職員室は一間四間の細長い小舍みたいな所で、全員腰かけると、その背後は通れなかつた。

教室の窓を開けると窓が下に落ちる所が多いので、うつかり窓を開けられなかつた。

その当時、新任の先生が、教室に入つて入口の戸を閉めると、途端に一大音響とともに廊下に倒れて、入口のガラス全部がこわれ、

先生が泣きそうになつた事がある。

二十八年、現在の木造校舎で勉強する事を許可されて、職員生徒は大喜びだつた。

そのころである。清水の舞台から飛び下りたような積りで、中庭に四坪の職員室を造つたのである。

狭いながらも独立家屋をもつたのである。

それが現在、売店になつてゐる建物だ。

やがて、職員室は現在の衛生室の一角に移り、その独立家屋は主事室と变成了のである。

それは現在の中庭の廊下のそばにあつて、ちょっととなつかしい建物だつた。

その建物は新館の建築が始まると、現在の手をひいて、中年の紳士が通つた。

体育祭の時だつたか、五つぐらいの子ども

するとその子どもが、

「パパ、このおうちの中の人を僕知つてゐるよ」といつた。私はオヤツと思って次のことをきくと、

「あの人小使さんだらう」といつた。

なる程と私は思つた。三十三年どころから、定時制の先生方には、全員上つ張りが配給になつた。その上つ張りがカーキ色で、いかにも用務員さんらしいものだつた。

私が苦笑していたら、その親父さんが、「坊や、よくわかつたね」といつた。

新館が竣工すると、まつ先に定時制が入つてよいといふ事になつた。

新館の照度はすばらしく、非常に綺麗で、生徒達は、大喜びで得意だつた。

都の方針は、校舎が新しくなつたら、まず定時制を入れるというのだそうである。ヤガクとかヤカンという名称が使われてい

たころは、居候みたいな扱いをしていた学校が、相当あった。幸いにして、わが定時制は創立当初から大変優遇されていたそうである。

全日制の先生方も生徒諸君も、その点、本当に立派で秀れていると思う。

定時制も来年は二十周年である。

二十周年の間に、教師側の定員も少しくふえ、生徒数もやや増した。

内容も、次第に充実しつつある。

中秋名月の日の観月祭は、可成の範囲にファンができる、学校行事として特殊のものとして待望されている。

演劇部の活躍もまた全国的に知られて來た。規模は小なりといえ、とにかく井草定時制今後も大いに発展してゆきたいと思う。

諸君の協力を望んでやまない。

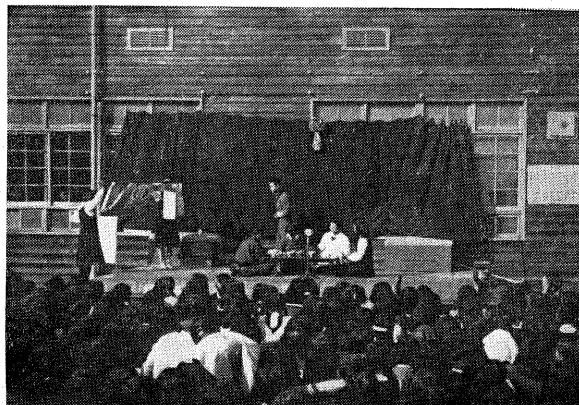
私はここまで書いて、妙に他人行儀な表現になつていて、気がついた。

定時制が、井草高校の中の特殊な別な存在みたいな書き方になってしまつたけれど、これは、記述の便宜上こうなつたので、要するに、井草高校に二課程あり、一つを全日制、もう一つが定時制、合わせて一本なのである。あたりまえの事ながら、書き添える。少しクドいかな。



17年まえの文化祭

昭和25年の文化祭は早稲田大隈講堂を借りて行なわれた。当時演劇部に男子生徒なく、モリエール「守銭奴」上演に梅木、横田両先生が特別出演した。写真中央は熱演する横田先生。



17年まえの送別会

昭和25年の送別会は、本校中庭で華々しく挙行された。世にいう青空劇場である。三年生女子（しかいなかつた）は、紙袋のおかしをたべながら、先生の仮装や、下級生の喜劇に笑いころげた。

古いアルバム

—卒業生回顧録—

回

顧

高女

沢田詩子

愛の眼で見守り育てて頂いたような気が致しております。年と共に、成長の時期に私の廻りにおいてになられた多くの師、多くの友、多くの知り人が、ただ懐しく『昔を今にするよしもがな』と思う時が、多くなりました。懐しい先生方のお名前を思い起こして、今まで心に暖かく残っていることを記してみようと思ひ立ちました。

日頃、母校にも先生方にも御無沙汰ばかりで、紙面ですから臆面もなくおとないも出来るのであるが、お眼にかかるのでしたら、申し訳なさが先に立つて顔もあげられない氣持でございます。私どもは昭和十六年入学の一番最初の卒業生という事で、在学中も特別に先生方から慈

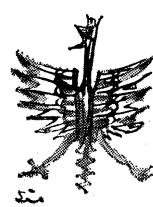
広瀬政次校長先生

学徒動員令が下つて明日から工場に出動すると決つた時、校庭の朝礼台で理科の実験をして下さいましたことが多くの人の思い出の中には残つているのですが、私は何時か寒い頃の朝礼で、『お店でたくわんを買う時は、桶の中に手を入れて、これを下さい、と言うよ

うでなければいけない』とおっしゃつた御話や、『定期は落とし易いものだから、紐をつけて首から下げておきなさい』との御注意、(これは私が一度定期を落とした経験があつたからでしょうか)そのお話しの折のお顔つきや手つきなどもよく覚えております。たくさんの方はいまだに実行した事ございませんが、もう少し年をとれば出来るようになるかしらと思つたりします。

杉山文雄先生(後、忍岡高校の校長になられました。日本史・地理担当)

何時も眞白なハンカチをやら取り出して額の汗拭つておいででした。その白さが大変印象に残りまして、私も家の主には一生懸命白いハンカチを持たせるよう工夫してお



ります。先生の授業は黒板が一時間できれいに埋り、ノートが大変取り易うございました。

青山兵吉先生（二年の担任でした）

昭和十六年十二月八日、日本が第二次世界大戦に突入した日、霜柱を踏んで登校しました

たら、（鷺の宮の平屋建の仮校舎でした）昇降口の黒板に真珠湾攻撃のニュースを大きな美しい字でお書きになつてあるところでした。少し高い所にある黒板がありましたが、先生は椅子に立つて壁に貼付いたように平たくなつて書いておいででした。先生からは身近にある物を観察する習慣をつけて頂きました。私はその頃はじめて毒ダミは白い花を美しい咲かせている事を知りました。

池田先生の裁縫の時間、隣の席の吉野茂子さんと二人で思案の末、先生に『ロクさん』（別に大した意味はありません）の呼び名を呈上。以後私達の間ではロクさん、ロクさんと呼ばれる事になりました。

青山千代先生（三・四年の担任でした。国語担当）

あまりお世話をなりすぎて、おまけに身近にありすぎて水か空気のようでした。抵抗なく何んでも申し上げられるのが、今になれば

ありがたかった事ですし、今後もありがたいと思つております。

先生の御年がはじめとても気になりまし

た。若いのか年取つているのか子供には見当

がつかないものです。

新井美二先生（生物担当）

その頃の男の先生は大抵くすんだカーキ色の洋服を召しておいででしたが、白髪で黒い背広姿の先生を思い浮かべます。温情溢れる一面、厳しい先生で、粗野な子達の轍をして下さいました。生徒が舌を出すと不愉快そうなお顔で厳しく叱咤しました。先生は暗闇でも御自分の蔵書が、どの本棚のどの辺にあるか覚えておいでだったそうです。燈火管制などが行なわれる環境でしたから、そういう必

要もおありだったのでしょうか。

田中 正先生（地理担当）

私が府立第十八高女に入れるきっかけを作つて下さった大恩人でした。子供にはよくわからないいろいろの手続きを経て、病氣でど

この受験も危ぶまれていた私を、入学願書の〆切りにも間に合わなかつた私を拾つて下さつた先生だったので。何時も心で深く感謝しております。

夏休み林門学校でいろいろの所へ連れて行

つて頂き、野山を歩く楽しさを覚えました。東大の美学とは、どういう勉強をするのかしらと、とても不思議でした。よくわからぬ文法の時間でした。時々生徒の机に腰掛けたり、女物の万年筆をお持ちになつたり、女の人の着るようなチョッキを着ておいでになつたり、でもとても無邪氣な先生だったのではないでしょうか。三角おむすびを逆にしたようなお顔で、大きな口を開けてお笑いになつた顔が眼に浮かびます。たつた一度だけ、こわい顔をして級全員をお叱りになりました。

鈴木貞三先生（東洋史・世界史担当）

歴史は個々の出来事を覚える必要もありますが、ものを大局から攬む事の大切さという事を教えて頂き、多方面に役立つていてるようで感謝しております。

戸村（藤田）静子先生（国語担当）

私はこわい厳しい先生でしたが、文法が非常に面白いものであることを教えて頂き、その当時のノートは後年長く利用させて頂きました。

あたりが張本人だと思いますが、『秋風がた

ちはじめればミス藤田首おとさじと包帯まけ
り』という一首(?)をものして(先生はお

風邪だったのでしょう)下敷を教室中にもわ
しました。ほどなく先生は見咎められて『何

ですか』と詰問なさっても、みんな無言。と
うとう職員室へ帰ってしまいました。その

あとすぐ担任の先生に小沢さんも松永さんも
呼ばれる一幕がありましたが、和歌(?)の

方は最後まで藤田先生のお耳には入れなかつ
たのではなかったかと思います。

永鳥(守邦)かをる先生(後、区立中学の
校長になられました。物理担当)

女性として立派な先生だったと思います。

当時の教科書には載っていない、新聞でしか
見ないような新しい科学的な事を種々教えて
でした。

水洗便所を清潔に使う方法を教えて頂き、
今更ながら偉い先生だなあと感心していま
す。

まだまだ書き足りないような気が致します
が、在校生の方々には御縁の薄い先生が多う
ございました。

懐しいお顔を思い浮かべて書きました。先

生方、失礼はどうぞおゆるし下さい。
(桜蔭高校教諭 旧姓、笛田歌子)

北の国から

高回 早坂玲子

身、井草高女に入学したのは、昭和十八年の
ことですから、戦争のさなかでした。そして

その後三年生の時に、終戦となりましたので
全くの「戦争のなかの青春」というわけです。

今でも願書を出しに行つた時のことを思い出
します。二月の末、風がひどく吹く武藏野の
片すみにぽつんと建つてある木造の校舎、そ

れが私たちの学校なのでした。「女学校」と
いう言葉から受けた、甘い、はなやかな感じ
は全くなくて、私はいささかがっかりしたこ
とをおぼえています。けれども、私はこの殺

私も、セミ、道産子ぐらゐの資格はありそう
です。いま、私の住んでる帯広市は、人口
ここで生れた文字どおりの道産子ですから、

十二方余、しづかなか道東の都市ですが、夏を
迎えると観光客の姿が目立ちます。特に学生
の姿が多いことは驚くばかりで、ジーパンに

大きいリュックというスタイルで町のあちこ
ちをかっぽしています。きっとところによれば、
北海道旅行は今や学生の「卒論」ともいふべ

きものになったそうで「北へ北へ」と草木も
なびく有様です。何はともあれ、この若さに
あふれた人達をみてると、もう廿年ちかく

昔の、私の学生時代のことどもが、自然に思
い出されます。私がいまの井草高校の前

なびく有様です。何はともあれ、この若さに
あふれた人達をみてると、もう廿年ちかく
ないで、まことにのびのびとした、活気にあ
ふれた空氣があつたからです。戦争はだんだ
んひどくなり、私たちの生活にもかなりの影
響を与えましたけれど、若かったせいでしょう
か、大してつらいとも思はずにすごしました
た。私は今でも、本をよんだり、旅行をした

りすることが好きですが、新しい世界、未知のものを求める、そんな心はやはり学生のころに植えつけられたようです。五年間通った学校への道。今でも目をつぶると、上井草の駅から、踏切をこえて、小さな川にかかる土橋をわたって校門までの道すじをありありと思い出すことができます。武蔵野そのもののようなあの緑の道。麦の穂がゆれて、菜の花が咲きこぼれていた道。ところがびっくりしました。先日、たまたま電車でそこを通りすぎた私の友達の話によれば、もうそんなものは影もかたちもなく、今はもうびっしりと家がたてこんでいたそうです。考えてみますと当然のことでした。私もたまたま上京すると母校を訪れて恩師におあいしたいと思うこともありますが、そのことをきいてから、きっぱりとあきらめました。せっかく私の胸にあたためているあの風景をむざんにこわしてしまふにしのびないからです。青春とは、失つてみてはじめて、その意味に気づくものとか。もはや手のひらからこぼれてしまつたものへの哀惜の念にかられるのは私だけではありますまい。けれども、もうそろそろ、その頃の私の年になろうとする娘の姿に、悠々たる大河のような人間の流れを見て、心のや

すらぎを感じます。八月の声をきくと、北海道はもう秋の気配がしのびよってきます。朝夕の肌寒いさやさやとした風、日ざしも黄ばんで、夏のおわりの花々もみな小さく、数も少くなりました。やがて落着いた、しみじみとした秋がやってきます。秋の好きな私にとって、それはひそかな期待にみちた季節でもあります。そしてまた一つ、年を重ねることでもあります。

(医師夫人)

一九五四卒業

六回 高校 大友和夫

「加山雄三」 クンが現代青年のナンバーワンならば、十三、四年前の井草高校の男子生徒も、その頃、男女の比率が六対四位で女子の天下だったので、多少学業成績が「悪条件」でも、ほんの少々美男子であればモテたことは確かです。まるで「小沢征爾」氏の学生時代の様でした。

演劇部員の私は、文化祭、送別会の都度、

他校を羨んでいました。というのは、當時講堂がない為に、育英学園の講堂を借用したり、部員は、セット・衣装等を大八車に山積みして……ガラガラ……と砂利道路を引っぱり運搬したものでした。時代劇のような情景を御想像下さい。

又、校舎や囲の堀等も現在のよう立派なそれではなく、通称、新校舎と呼ばれた板廊下は惨たんたるもので、部分的に良質のスプリングが吊掛られているが如く、とてもリズミカルに歩く事が出来ました。

四、五年前の夏期休暇中に橋幸夫主演のテレビドラマのロケーションで運動場を借用、昼食時に校長室を利用して戴きましたが、昔の「オワツイ」臭い面影はなく近代的な建築を見て、「これが、我が母校なのか！」と、自慢してみたり、ひとり、味気なく思つたり、複雑な想いでした。

へんな回顧談になりましたが、正直なところ卒業して十二年にもなると級友の氏名さえ忘れてしまう程度です。私のサラリーマン生活が多忙すぎるのかも知れませんが……。

(現在、TBS映画部勤務)

私の井草時

一高校 大西芳江

高校時代をふり返ったとき、とても楽しかった、と言うと嘘になります。あの青年期特有の情緒不安定におそわれて感情のメトロノームは大きくゆれ動き、ほんの些細なことも一喜一憂したものです。その積み木細工の様にアンバランスでこわれそうな心をなにか必死なもので支えていたいじらしい姿は七年余を経た現在の時点からみるとなんとも幼稚でときにはたまらなくはずかしくもあるのですが、それはそれとして、やはり井草は私にとってなつかしい場所なのです。

入学した三十一年は井草が男女同数共学になった二年目でした。そのせいかフォーランダンスが盛んでお昼休みは馴染みのメロディに誘われてついふらふらと中庭に出たのです。オクラホマ、コロブチカ、コリードetc……そして時々は素敵な生徒会長さんがニコニコ笑いながら踊つておられるのを図

書室の窓から眺めたりしました。その会長さんはもっぱら彼女をからかうのを楽しみとしていたのですがそのふくよかなNさんが国語の朗読の際、氣色をうつかりイロケと読んだものですから……、古文の時間は更に不思議な読み方がとびだし、夜寒（よさむ）をヤカンと読んだ私などまだ軽傷で、待たん……をハベタンと読んだ友人Mさんは以来卒業するまでそれが渾名となりましたが本人も別に怒らなかつた様です。そしてあだなでは、なんといつてもクラスのアカデミー賞『仁和寺の法師』は現在某都立高校の数学の先生です。

一年生の文化祭では劇に出ました。『死神に命をもらつた話』友人Fさんと私は意地悪なおばさん役、遺産をめぐつて二人が言い争う場面ではどうしたはずみか突然Fさんがまたも吹き出てしまい、私も笑つてしまい、あとで部長にひどく叱られて、午後の部では絶対笑つては駄目だと念をおされたのでも、その場面に近づくときは胸がときどきします。そのハンサムで恐い部長はダンス部の部長さんとよく御一緒でしたが、そのダンス部の部長さんこそ今テレビや映画して

いる小林裕子さんだったと思いません。

授業に關しては勉強そのものが楽しいといふ境地ではなかつたので始業のベルが鳴つて先生を待つ時間の長きを願つたものの、いざ前の戸がガタッと動いた時は妙な安心感を感じたのです。そしてそれぞれの先生方の個性ある授業は、その姿、声、身振りと共に強く印象にのこっています。日本史の最初の時間、「歴史はなに故に学ぶか」と急に指名されて咄嗟に「漢文に故きを温ねて新しきを知る」ということばがある」と答えたときは毛利先生から大変褒められうれしかつたけれど、中間考査の点はよくありませんでした。語れば尽きぬ井草の想い出です。世に高校は数あっても私達の母校は唯ひとつ、そしてその井草は年々改築され立派になって参ります。卒業生として母校の發展を願わぬ者はありませんが私達のそこそこにおもい出のある住み順れた家がなくなつてゆくような淋しさがないでもありません。先日、当時もつともおとなしくてたまにはしゃべることもあるのかしらと思つていた友人がクラスの男性のトップを切つて結婚されたと聞いて歳月のしからしむるものをみたおもいでした。けれど私達がどんなに変わると、共に語る井草は、お化けの出そなトレイや、つぎはぎだらけの廊下やダニの出る天井のなつかしい母校なのです。

二階建ての多い

ヨーロッパの農家

生野真直

(旧職員)

私は、昭和十九年から三十五年まで井草高校の地理教師として、若い時代でもあり、張り切って十七年間を勤めあげた。なつかしい思い出の多い学校である。私は井草時代から、毎年の暑中休暇を旅行に当ててきた。それは現在でも変わっていない。昨年は一三〇名、本年は一四〇名の全の国全国の地理教師をさせて、(団長として)ヨーロッパの二十五日間の旅行を試みた。ヨーロッパへの往復は航空機によつたが、現地のヨーロッパでは、貸切バスを二十三日間走らせての旅であった。

有名な都市よりも、それを支えている農村地

帯の觀察に重点をおいての地理的調査旅行であつた。書きたいことはいろいろあるが、紙面に限りがあるので次のことを一つだけ述べることにする。

「二階建ての農家」という、平凡な題目である。ヨーロッパの平野部では、粘土しかねが多い。山地部では、石造家屋や木造家屋が

あって、日本とは、建築材や建築様式の点で、かなりの相違がある。これは誰にでも直ぐ分ることであるが、もっと觀察の目を深めると、二階家以上の高い家の多いこと、一階家であつても地下室があつたりする。このことについて考える必要がある。

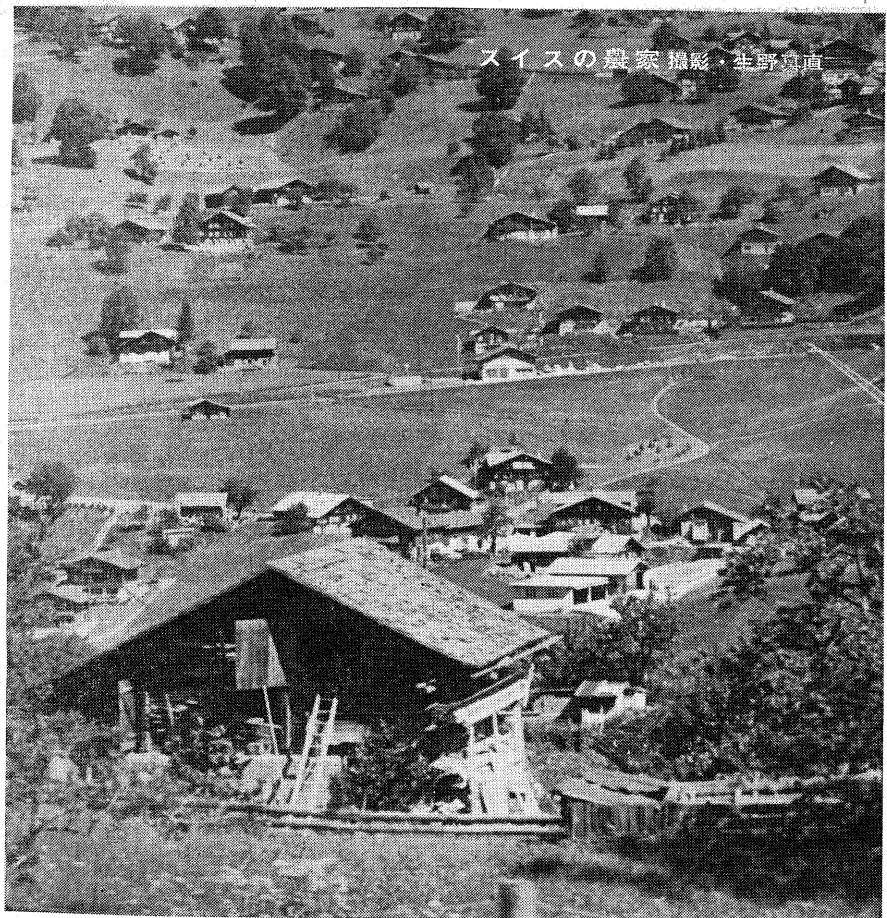
スイスのある農家を訪れて、寝室の配置について聞いてみた。主人の答えでは、自分達夫婦以外の家族は全部二階であつて、自分達だけが一階に寝室を持つている。これは例外的で、一般的には、二階が寝室に当たられてゐるとのこと。

また家屋の外に階段があつて、外来者はいきなり二階に通れるようになつてゐる民家をあちこちで見かけるのである。要するに、ヨーロッパの風習として、一階を無視する傾向がある。そこでこの原因をさぐるために中世の民家について見ると、その頃は、外敵の襲撃がはげしく、民家の一階は窓なしで、そこには、収穫物を貯蔵し、重要器物を格納し

て、掠奪から守る倉庫として利用していた。一階に行くには二階から屋内階段で降りることになり、二階は外部から階段で登つて行くという構造になつていた。こうした過去の習慣が今日まで残つてゐるものと考へられる。ヨーロッパでホテルに宿泊し、部屋の番号をもらうと、二階が一階、三階が二階と必ず実際の数より一つだけ少い数字になつてゐる。

このことからして過去のヨーロッパは、日本に比較して、はるかに安定性の低い国だつたといえる。さらに家屋そのものを見ても何となく外敵に備えての構造である感を深くする。煉瓦や石で、壁は厚く固められ、がつかりしたドアがあり、鍵がびんとかけられてゐる。紙や薄い板で囲まれた日本家屋と比較して、はるかにがつかりでできている。

ついでに家屋の集団である村や町の構造についてみても防禦態勢が整つてゐる。日本の城郭建築をみると、いかにも戦に備えて、その機構が整い、造りも堅固にできている。しかししながらあくまでも、武士という特權階級層の争いの場であつて、一般庶民は除外された構造をもつてゐる。それに反し、ドイツのローテンブルグを例にとると、この町は、中世の様相をそのまま現在に温存して、當時の様子がよく分る。町の周囲は城壁で囲まれ、町全体が一つの城であつて、庶民も戦の際には然渦中にまき込まれた。かつての三十年戦争の時には、きずついた父を子供が助けながら親子ともどもに奮戦し、ついに町



スイスの農家撮影・生野真直

を守り通したという伝え話がある。とにかく日本に比較し、かつてのヨーロッパは、安全性に乏しく、ぶつそうな社会であったということである。国外に出ると、はじめて、日本の良さや有難さが分るものである。私の二度のヨーロッパ旅行から得た印象の一端を述べて筆をおくる。

(江東商高教長)

ヨーロッパ隨感 平井 英一

若しい旅であったが、それが、すぐさま楽しい想い出に転化する。長期旅行のいくつかを、今まで、私は国内のバス旅行で味わってきた。それは、時に強行という表現に形容される、キツイ日程の旅行であった。だが、費用と成果とを、純粹に見くらべて、いつも軽い疲労と、淡い満足感を味わっていた。

それは、ついいましがた、苦難の岩峰をよじ登り、志遂げ、山麓で頂を仰ぎ見ながら憩い、かつ喜びあう、アルピニストの心にも似ている。過去のそうした積み重ねの上に、ヨーロッパの研究旅行が、成功裡におこなわれた。昨年と今年、二回のヨーロッパ旅行である。その団体の名は、全国地理教育研究会。その団長、会長としての生野先生のファイトと理想に、敬服の念を禁じ得ない。

ヨーロッパはいい。その目で日本を見直すこともまたいい。そう心の底から叫びをあげる。ある人が、昔、「隅田川の水はテムズ川に通じてゐる」といった。現在、羽田の滑走路は、花のパリに通じている。コンコードの夢が実現する数年後、世界の空はまた激しい歴史の一役をめぐっている。

(本校教諭)

特

集

生徒会活動



現況報告

寄稿 現在の生徒会

中田

(生徒会長)

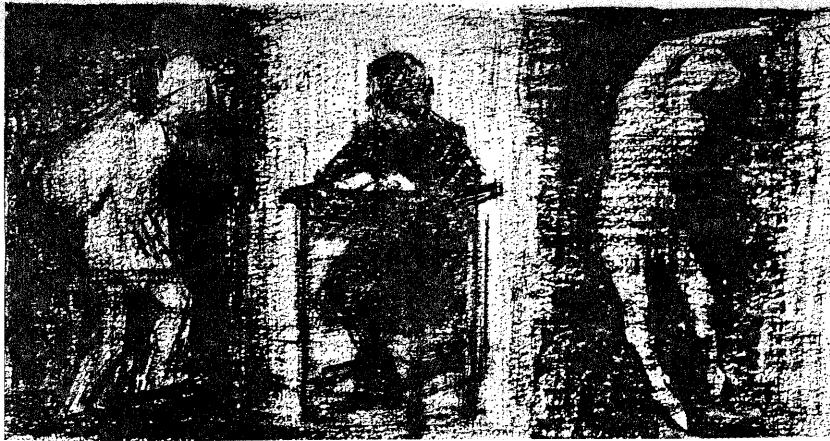
創立二十五周年を迎えた現在、「わが井草高校」には色々な問題が残っています。

まず一つの問題として、全日制と定時制との交流があります。井草高校ほど全日制生徒と定時制生徒との交わりの少ない学校はないと思われます。全日制生徒の三年間の生活、定時制生徒の四年間の生活の内にお互いが意見交換して、お互いを知り合う事は全く言つて良い程ないので、そのためにお互いの

間に信頼感が生まれず、目に見えない不信感が生まれています。けれども、最近、生徒会活動を通じて、例えば、定時制の井草祭への

参加や、全日制の定時制のお祭りである「観月祭」への参加、各クラブ、委員会同士の交流を通して、全日制と定時制の意見交流が行なわれてきています。そして今後、小人数の人達のみで行なわれてきた活動を井草高校全體でやれるようにしたいと思うのです。





(青山 兵吉・画)

その次に起る問題として、「井草の自由」という事を挙げたいと思います。この問題は何回もくり返して言われる事なのですが、井草生の自由の解釈が無責任だと、断言したいと思います。自分自身の解釈によって、秩序を乱す人が「わが井草」にもいると言う事は悲しい事ですが、我々は我々自身の規律によつて、本当の自由を求めて、信頼の内に生まれた自らの手でから取ったそんな自由を求めて、前進したいと思います。

特に重要な問題の最後として、生徒会活動の不活発を言いたいと思います。もちろん生徒会活動といえば、委員会活動やホーム・ルーム活動のみでなく、クラブ活動も含まれているのです。例えば、ホーム・ルームの不活発が挙げられます。毎週一回のホーム・ルームの時間を無責任な放言で終わらしてしま

い、役員を適当に選挙してそのまま「お茶をにごしてしまう」クラスが何と多い事であろうか。そんな選挙で選出された役員が委員会にも出席しないですましてしまうのであろう。次にクラブに目を移してみると、部員数の移動が非常に複雑な事がよくわかる。例えば新入生の入部した春先は相当、多大な数であるが、秋になれば、その数が半分にも減つてしまふと言う事です。各個人にも問題があるでしょうが、各関係者にも考えてもらいたい問題だと思います。

色々な事を、強く非難しながら書いてきましたが、井草生全員が考えている問題を提示して来たつもりです。みんなが信頼している「わが井草」を、みんなが愛している「わが井草」を我々だけでなく、世界の前へ出してやろうではありませんか。

寄稿

生徒会について

副生
徒
会
長

猿子竹夫

僕は、井草の生徒会の現状にとても不安を感じている。と言うのは、前々からいわれ続

けているように、生徒が生徒のための生徒会に非常に無関心であるからです。そしてそれ

は、一面では、役員選挙における立候補者の極めて少ないと表されている。このままでは「立候補者なし」ということもあります。現状である。

また他面では、委員会やクラブ活動などの生徒活動にいっさいかわらずに、毎日授業が終るとせつせと家に急ぐ人が多いということに表われている。確かに今の大學生制度においては、人より少しでも多く勉強をした方が得かもしれない。だからといって学校をよく言われる予備校化してしまい、勉強勉強に明け暮れるだけが眞の高校生活だろうか。

僕は高校生活における生徒会活動は、勉強とはちがつた意味での重要性を大いに持つてゐると思う。何かの委員になり、いろいろな仕事を一生懸命にやるものよいだろう。

またどこかの運動部に入部して自分の好きなスポーツをやり体を丈夫にするのも、芸部に入部して自分の趣味などをのばすのもよいだろう。なにしろこのよくな生徒会活動に参加すればなにかを得るでしょう。例えばクラスだけの友達からもっと多方面にわたる友達ができるだろうし、生徒会会則にもあるように楽しい明るい高校生活をおくれるのではないかと思います。この前期にちょうど僕は

副会長という立場にたつたので会長を手助けし、一生懸命に前述のことや、その他の井草の諸問題を少しでも改善できるように努力したいと思います。

寄 稿

新聞の楽しみ

新聞委員長 荒川 俊昭

昭和十六年に現在の都立井草高校の前身である東京府立第十八高等女学校が設立認可され、から今年は二十五年目にあたる。その当時の新聞はどうなっているのだろうと思つてみても、今では全くわからない。現在の井草新報の紙面の大きさはタブロイド版で、今保存して残つてゐる一番古い新聞が、日常の家庭に配達される商業新聞の大きさで、プランケット版になつてゐる。それで今のが、新報みたいな狭苦しい紙面じゃなくて、あの商業新聞くらいの大きさの紙面に原稿を埋めてみたとい勝手に夢想することがある。

一つの新聞には苦労話が沢山あるが、それだけの落差をなくす満足感もわれわれに提供

してくれる。

新聞の楽しみはきっと厳密に言えばこうだ。それは、それこそ「ある仲間」。自分一人で新聞を作つたつておもしろくないはずだ。相手の二、三人と組んで何かの題材をそれなりに満足すべき原稿に仕立てていくことだ。

一人でやるより「複数」の方が仕事もずっとやりやすいし、いいものができる。やりがいもあつたといふものだ。グループ研究といふことがよく言われるけれども、新聞においては二、三人で結構。そんなグループが増えて

われわれの身近かにある問題を取りあげていけば、新聞の役割りといふものも自然に果たされていくのではないか。クラスの中でも身近な問題を取り上げてはいかがなものか。気の合つた者同士でおもしろい題材を見つけてそれなりに要點をつかんだ結論なり統計なりをH.R.にでも発表すれば、H.R.委員が苦労することもないだろう。

二十五周年にあたつての感想は、この新聞を作ろうとする人達に模範となるような立派な新聞を作りたいという気持ちに落ち着く。

井

草

祭

常任委員会
委員長 倉重 哲幸

昭和四十年度、十一月四日の生徒総会の時に、吉増会長が提案して、井草祭常任委員会が成立いたしました。ホーム・ルームから、1名づつ選出された委員で構成され、当初の目的は、総務会が井草祭を開催していたのでは、本来の目的からはずれてしまう。井草祭は専門委員会へ任せようということになり誕生したわけです。

仕事は、井草祭の企画・運営と井草祭に関しての専門的な技術を修得し、井草祭を成立させて行く過程、と井草祭のときに、修得した技術を発揮することでした。そこで、6ヶ月の任期では満足な技術を修得できないだろから任期は一年として異例の井草祭専門機関が誕生したわけです。

今年の常任委員会は、最初の認識がしつかりしていなかったようで、ただ単に井草祭を作りつづります。しかし、あまりやる気の

なかった委員が、一生懸命、活動してくれるようになつた時は、ほんとにうれしかつた。

一回目の委員会なので、なにもかも新しくわからないことばかりですが、今年は、放送のことで放送委員と、うまく連絡のとれなかつたことや、常任委員の下の、八つの小委員会が縦、横の連絡をじょうずにとらず、単独に行動しがちだったことも、過去に全く経験のない委員会であること、そして、各委員が専門的な技術を身につけていないこと、などは、いたる所で弊害を招いて、何もわからぬい委員達は全くたいへんです。日程決定のときなど、五つの案に委員がとまどい、文化祭の場所に、学校の講堂と、杉並公会堂の二回公演の二案に分かれて下校時刻を過ぎても決定できませんでした。結局杉並公会堂を使用することになりましたが、早く学校で井草祭ができるようにしてほしいのです。

今年の井草祭は、各クラスの委員が作りました。内容は、例年と変りないかも知れませんが、常任委員会の初仕事は、失敗でもいいと思います。常任委員会が作り上げたものですから！ 来年度からは、今年の多くの教訓を参考にしてもっとりっぱな委員会にして、吉増会長が意図した、生徒の井草祭を作りました。



い。と思います。又生徒は必ず何らかの形で、井草祭に参加してほしいと思います。クラブに入つて活動することも、ボスターの図案を作成することも、井草祭参加はたくさんあります。必らず参加して下さい。井草祭は井草のものです。井草で作つて、井草生と父母、他校の多くの人に見てほしいものです。

部

報



学芸総務

佐藤秀幸

七月の終りに学芸部の事を書くように依頼されました。学芸部は性質上華やかではなく一見地味な存在となつてるので、どのように書いたらいいか考えてしました。でも地味ながらこの学校が開校と同時に年々少しづつふえていつて現在では運動部にも負けないぐらいに成長し、部数も十三にふえました。参加人数も三二四名余とまだまだ少ない気もしますが、それでも各部ともそれぞれの方針や目標にそつて前進し、活躍しています。それではごくごく大まかに各部の様子を資料をもとに紹介していくかと思います。

吹奏楽部

よく「ラバン」の略称で親しまれ、学芸部中最も華やかな部です。週たったの八時間という少ない時間内での練習は相当にきびしいものです。練習はたいへん激しく、あまたるい考えでは絶対に許されないし、考え方を変えるまであらゆる処置を取っています。血の出る様な練習の結果コンクールなどで賞も取

れだし、学校行事にはほとんど出演できるようです。皆我欲を捨て、夏休み全部返上してする練習の苦しさ、楽しさというものはやはり、実際に活動した人のみが知るものです。内容的に実質的に学芸部、多数の運動部を上回るというのもわかるような気がします。十年の伝統を守りぬき、さらに前進している部で力強さが感じられます。

美術部

この部は使用部室でいろいろと苦心していますが、そんな事とは関係なしに部員は授業以外のものをするという方針で石こうデッサン、油絵、木彫り、粘土などに精を出しています。しかしあまり活発であるとはいえないようです。部長曰く「でも昔よりはずつと良くなっているのよ。」今後もっと楽しい理想的な部にするために、内容を充実させるためにきょうも部長以下二五名着々と前進しつつあります。

生物部

現在新館二階の生物準備室に間借りしているので多少不便な面もありますが、何といつても毎年行なわれている三宝寺池総合調査を

するのが今ではこの部の伝統(?)のようになり、部長が変わるとびに引き継がれています。なにしろデーターは正確さが要求されるので皆必死に取り組んでいます。ことしからは植物調査も加わりもつと幅の広い安定した部になっていくでしょう。

理 科 部

この部は古い伝統を持ち、内容も充実しているように見えますが、現在は天体班と化学班、物理班のうち化学班のみ重点的に活動しているようあります。高分子、定性(沈澱法)、(ペーパークロマト)など、かなりむずかしい専門的(?)なことをやっているようです。よく展覧会では大きなマスクットを作ったり、プラネタリウムをやったり、アトラクションに富んだ部といえるでしょう。

文 芸 部

この部の活動の中心は年三回発行する同人誌『鳳雛』にあり、ほとんどの時間はこれにつきこまれています。部員は詩や創作を懸命に書いています。特徴は何といってもダベリングの多いことですが、すべて部活動に関する話ばかり。活動日の半分はこのダベリング

になつてゐるようです。それからこの部の最大の悩みはともに新入生の入部が少なくて大いにPRするのに苦心しています。

手 芸 部

校舎の西端、一見陰気そうな被服室に活動目になると女子ばかりのせいかおしゃべりの園が聞きます。手だけを使うので口は開きっぱなし。この部はどれも細かい単調な時間のかかるあきやすい作業が多いのですが、現在自分達で考え出した独創的新デザインを研究しているようです。また活動のすべてを井草祭にかけているような感じを受けるような部もあります。

音 樂 部

読んで字のごとく、音を楽しむ部である。だから各種の音楽と名のつくものを弾いたり聞いたり、歌ったりしていますが、やはり歌うことには重点を置いています。毎年文化祭ではオペラ的なものもやっているし、チエロ、バイオリン、ピオラなどの合奏、レコード鑑賞をしたり本当に楽しい部です。音楽会やコンクールなどに出演したり各方面になかなかの活躍を見せていてます。

社会科研究部

歴史班と現代史班との二班にわかれてい

演 戲 部

この部は文化祭などすでに活躍を披露しているので御存じのはずです。しかし華かな反面、せりふを暗記したり、道具を作つたり舞台効果を考えたりとても大変です。この部も部員不足で困っているようです。大道具類はよくパン屋の前に山と積まれていますが、道具置き場がほしいところです。自分達のオリジナルもやっていきたいそうで、これから

茶 道 部

ことしから学芸部の仲間入りした最も歴史の浅い部です。それだけにはりきり方は他の部以上です。方針といえば礼儀作法、高い教養を身につけるところにありそうです。練習日には先生を頼んで出張教授を受けているようです。きっと展覧会などでも和敬静寂の精神を我々に披露してくれることでしょう。とにかく現在のところは良い部にするためにがんばっています。

て、それぞれに特色を十分發揮しています。この部は展覧会の時しか発表の機会が無く、そのため展覧会が一種のアトラクション的形式になってしまっています。だからこの部は非常に地味な存在となっています。でも地味ながらあちこちに出かけたりあらゆる資料を集めたりして何とかアトラクション的なものにしないよう希望しています。

書道部

書道は日本に古くから伝わるもので、精神を統一して書くものである。だから字は作者の心がこめられています。展覧会では会場いっぱいに掛けられた作品をじっくりと見て理解していくって始めて、書道の書の心がわかり書いて道の字が本当に理解できるとのことです。でもこの部ではみじんもそんなかた苦しい感じは受けません。もっとも皆に書道を広めていきたいところのようです。

写真部

一応小さな暗室つきの部屋をもつています。運動会、文化祭、展覧会など学校のあらゆる行事のニュース速報を写真ですぐに発表しています。現在カラーワイドを現象するまで

にいたりませんが、すぐにでも出せるような気のする活気のある部です。性質上個人的な活動になりますが、週一回の部会でまとめていっています。部内のコンクールなどで大いに腕を競い、技術の向上に励んでいます。

華道部

一口にいって生け花をする部です。流儀は草月流で週一回金曜日だけ行なわれています。基本花型、自由花型、投げ入れ型などそれぞれの個性を生かしたものを習っているようです。花嫁修業にとらがちですが、生け花を通しての人間形成を創っていくところに良さがあります。井草祭ぐらいしか発表の場はないので、一般の人に無関係のような感じを受けるぐらい、おしとやかな部です。

以上本当にごく大まかに各部の紹介をしてきました。これだけでは各部の十分の一も紹介できません。それだけには各部の一同先輩の時はよく見てきて下さい。とにかく学芸部はほとんど展覧会しか発表の機会がありませんから…………。もっともっとよく知りたい人は実際に活動に参加して下さい。そうして少しでも学芸部を理解していく下されば幸いです。

運動部

陸上競技部

「敗北」／＼この二字が今年の陸上部に押し売りの様に頼みもせずにやつて來た。今までは諸先輩が全国大会連続四回出場し、また都是諸先輩が全国大会ににおいてほとんど入賞という輝やかしい実績を築きあげてくれた。：：：にもかかわらず、この輝やかしい業績が東京の道路の様にいとも簡単に崩壊してしまった。

この時点になって、私達男女部員一同先輩に追い着き追い越す意欲を持つて一丸となり、今秋の新人戦、そして来年のインターハイめざして、ある時は、隣の魚を盗んで逃げまわっている猫の様にひたすら走りまわり、又ある時は、猫についているノミの様に飛んで、苦しくもなごやかな練習に日夜励んでいます。

ハンドボール部

我井草高校ハンドボール部は最も伝統あるクラブで、私達の先輩は九年連続関東大会出

場というすばらしい記録を持つてゐる。

しかしこの二、三年、先輩方の期待に応えることができず苦しんできた。が今年こそはと部員一同ファイトを燃やして練習に励んでいる。現在部員は十八名、皆それぞれ個性があつて楽しいクラブだが一年生の部員が少ない。これはこのクラブの大きな悩みの一つである。とかく運動部などは、「クラブと勉強が両立しない」といわがちだが、高校時代でなければ出来ない、そして味わえないものがたくさんあると思う。クラブにはいつて厳しい練習に耐えることも、友達とは、先輩の方の色々な影響をうけることも一つの勉強だといえるのではないでしょか。

柔道部

現在、井草高校のクラブのうちで最も充実したうちの一つが柔道部です。重い畠を五十枚もやつとのことで敷き、それから稽古です。部員数三十名は、運動部でも多い方であります。月、水、金、と一週間に三日の稽古ですが内容豊富で、その三日が実によく生きています。柔道はそれこそ、体と体をぶつけあう格技で、寝技のときなど下になつてゐる者は相手の汗を飲んでの稽古です。そんなこと

から、互いが親密になり、部員同士の友情はおそらくクラブででしょう。理にかなつて、人間を倒す美技はまさに芸術の域です。試合成績も上です。実力は第三学区で今のところ第一位。第五支部(練馬と三多摩)でもベスト4には入っているでしょ。その日その日が充実していく、前進あるのみといった感じが今の柔道部の姿なのです。

剣道部

まず、練習日は、月、水、金の週三回。寒中稽古(一月上旬、約二十日間)と暑中稽古がある。現在部員数は、三年生十一名、二年生八名、一年生十二名である。こどしの宿は、今迄のコーチの方が忙しく、できなくなつたので、かわりの人をさがすのに苦労しましたが、結局二年生のある部員の親に適任者がおられたのでお願いした次第である。

それから公式試合の成績はさっぱりダメ。

今度の全国予選、来年度の新人戦には、上位に進出しようと部員一同はりきつてゐる。

(男子) バレーボール部

僕達男子バレーボー部は、二年生の部員がなんと三人、という少なさで、ほとほとまつています。一年の時は七、八人いたのに皆、勉強とか持病の為などでやめて、残つたのはたった三人きりなのです。そのため、一年生をなんとかおおぜい入部させようとするのですが、仲々三人ではうまくいかず、現在、全部員でわずかに八人です。そんなわけで、公式試合もまともにできず、今迄に勝つた試合は、六回中一回という情けなさ。でも部員

で、公式試合の前だけは、日曜日も行なう。

部員は、一年の頃はあまり名前を覚えられないほどの人数が入ってくるが、二年になると覚えられる位の人数になつてしまふ。卓球部は、きびしい練習の中にも楽しさがある。卓球部独特のものだ。又、たくさんある先輩が来てくださいますので、指導回数など多くの良いコーチに恵まれています。さようも部員は練習に励んでいます。

卓球部

現在、卓球部の活動日は、月、水、金曜

は一年生も二年生もはりきっています。

(女子) バレーボール部

バレーボールと言わればきっとオリンピックのあの女子チームを思い出すでしょう。

そして彼女達がその栄光への道の途中で、想像もできないようなきびしい練習を経験したということも。私達はその練習の何分の一え何十分の一かもしれない練習をしているのだと思います。何十分の一かもしれないけれど私達にはつらい練習です。バレーとは個人技ではなくチームプレーで成り立ちます。チーム・ワークというものはむずかしいもので簡単にできるものではありません。私達はチーム・ワークを大切にしながら各人のプレーを向上していきたいと思っています。さまざまの問題が起り考えさせられた日もありました。

現在の練習は決して楽ではないけれど終った後の充実感はなんともいえません。バレー部であるという誇りとバレーが好きな私達、どんなに練習がつらくても克服していくうと思います。

(男子) 庭 球 部

部員数、三年五名、二年十名、一年六名、計二十一名。東京都における現在の成績は、

関東大会に二年連続出場という素晴らしいものです。しかし、ことし僕達は少なくとも実力から言えば、全日本大会に二チーム、関東

大会に三チームは出せたはずでした。それな

のに全然成績が悪かったのはガッカリでした。学校対抗は昨年の八本シードと比べて四

回戦とは情けないです。これはだれか練習の為でしょう。練習日は、雨の日を除いて、

月、火、木、金、土です。練習は決してきびしくありませんが長続きしないでやめていく

人がいるのが残念です。現在の練習方法はまったくだらしがありません。これは生徒会や

学校がテニスコートをバレーコートとしていつしょに使っているので仕方ない事ですが、

部員の気持だけでもきちんとしたいものです。

(女子) 庭 球 部

私達は現在、一年生十五名、二年生十名の計二十五名で、毎週月曜日と金曜日を除く四

日間を、練習日として活動している。練習日

には日曜日も含まれていて、一週間の大部

分、コートに出ている。そのおかげか一年生同士、二年生同士、顔をあわすのが多いため、クラブとしてだいぶまとまってきて、

良い傾向だと思う。一年生を迎えてから、もう一学期を経てしまったが、先輩も、練習日には、色々なことを犠牲にして必ず教えにきてくださいり、私達もそれに応ずることができ

るよう、はりきっている。テニスというスポーツは、個人競技の素質が大部分を占めてい

るので、バラバラになりがちだが、そこをひきしめているのは、やはり部長の力である

う。これから二年生にとって二つの大事な試合もあることだし、はりきって活動して、

高校生活を、おおいにエンジョイしたいと思う。

山 岳 部

本年度の山岳部は、男子十七名、女子六名で構成され、今年の合宿には、十一名が参加しました。本年度の山行は、四月から四回と八月以降は二回あります。今年の北アルプス夏山合宿の状況をお話しましょう。男子は八名で鳥帽子岳、雲の平を経て槍ヶ岳までのコースをやりました。女子は横尾にベースキ

ヤングを設営して放射状登山をしました。鳥

帽子への道は、日本三大急登の一つと言われ

我々も途中でビバークをせざるをえませんで

した。

岩場では道を失いがちだった。また槍ヶ岳

の雪渓を滑り降りた際予想もしなかった猛ス

ピードになって砂利の上にほうり投げられた
りした。今年の合宿をかえり見ると、ビバー

ケした時に、水が少なくて苦しんだこと、虫
に悩まされたこと、食事のことなど、苦しか
つたりしたことが楽しい思い出となつて湧き
だしてきます。

皆さん山はほんとにいいところです。

山岳部では入部希望の人を待っています。女
子は一年生が少ないのでも特に歓迎します。

サッカー部

最近の状況、二月の新人戦では準決勝で帝
京と戦い延長戦の末、抽選勝ちして決勝に進
んだ。そして強豪城北と戦つたが善戦空しく
二対〇で敗れた。しかし見事な試合ぶりでみ
んなベストを尽くした。六月の全国大会予戦
は、三年生が抜けて全く新しいチームで試合
に臨み、二回戦まで順調に勝ち進んだが、
三回戦目に一対〇と無念の涙をのんで敗れ

た。わが部は、関東大会、全国大会出場と数
多い経歴がある。その伝統の本大会出場目指

してみんないっしょうけんめい練習にはげん
でいる。

(男・女)バスケット部

始めに男子バスケットボール部を御紹介し
よう。部員数三十三名。この中で、一年生が

十四名を数えていることは、今後たのもしい
かぎりである。現在は、三年生を除いた二十
名が、火、木、土曜日体育館狭じと、走り、
投げ、飛び跳ねている。現段階は、基礎体力

の充実と、基本動作の習得に全力を注ぎ、當
面の目標である、新人戦に備えている。体育
館の蒸し暑さと戦い、練習不足はファイトで
補って活動していきたい。

さて女子バスケットボール部は、三年生七
名、二年生十三名、一年生十名で活動してい
る。先日は、皆さんも御承知のように、三年
生を中心として関東大会に出場、大いに気を
はいている。現役選手も先輩に負けないよう
にと、この暑さの中で毎日のように、激しい
練習を続けている。夏季合宿に備えての練習
が主である。狭い体育館で窮屈ではあるが一
生懸命努力するつもりである。今後とも一層

の激励をお願いしたい。

(男・女)体操部

体操競技は、男子、床運動、鞍馬、跳馬、
つり輪、平行棒、鉄棒。女子、床運動、跳馬、
平均台、段違平行棒からなる運動競技です。

男子六種目、女子四種目で、色々違った型
の運動があり、見ていても楽しいでしょう。
運動をやっていても楽しいのです。技がきれ
いにきまった時は気分爽快。皆さんもやつて
みようとは思いませんか。

それにも現在部員が少ないので弱っています。
す。体力倍増、健康増進のためにも体操部に
入るといいです。ぜひ体操部に入ってきてください。
ただし、本当にやる気がある人にかぎります。
途中でやめてしまつては何にもなりません。
せん。

先輩たちも良い人ばかりで、手をとり、
足をとりして教えてくれます。
体操部に入ろう。

写真は井草高校山荘入口と
二年生女子生徒



山荘ガイド

◆ハイク・コース

池の平（山荘—兎平—籠の登山—池の平—
山荘）8 km

鳥帽子（山荘—鳥帽子—湯の丸山—山荘）
8 km

鹿沢温泉（山荘—湯の丸山—角間峠—旧鹿
沢温泉—山荘）9 km

湯の丸高原は涼しい美しい花の高原であ
り、冬はスキー場として有名。また、ア
ルプス・八ヶ岳・富士・白根などの眺望
もきく名勝の地である。

◆あし 上野—小諸—奈良原—湯の丸

◆あじ わらび・ふき・ぜんまい・野沢菜つ
けなど四季の山菜を薬しめる。くるみもこ
の地の名産。

◆宿泊 在校生五五〇円。卒業生・職員六五
○円

◆申し込み 問い合せは 東京都立井草高校
事務室（920）○三一九

山荘ガイド

編	集
後記	

◆創立二十五周年——人間ならよ
うやく一人前の社会人となる年

ごろである。長いこと井草を眺
めてきて、教育内容・校舎設備・生徒数等々
いろいろな面で、なんとか一人前に成長した
という感が深い。これからよいよ飛躍期
だ。大いに期待したい。

◆二〇周年のときにも記念誌を編集したが、
今回もまた大役を仰せつかった。青山・古屋
・岡垣・白井・久我の諸先生のご協力を得
て、期日に間に合わせることを最大目標にだ
いぶ無理をしたので、完成の喜びは大きい。
校正誤りや不備脱落等は、あげて私の責任で
ある。

（山本・記）

井草高校二十五周年記念誌

昭和四年一〇月二九日発行

発行者 都立井草高等学校

東京都練馬区上石神井一ノ四〇

T E L (九二〇) ○三一九・○三二〇

印刷所 大盛印刷株式会社

東京都豊島区雑司ヶ谷町一丁目三八番地

★本誌編集協力 株式会社 燈社
東京都新宿区戸塚町一ノ四一〇

校

歌

作詩 土岐 善磨
作曲 芥川 也寸志

Allegretto $\text{♩} = 126$

A musical score for 'Kagaku no Uta' (Science Song). The score consists of six staves of music for voice and piano. The lyrics are written in Japanese below each staff. The key signature is B-flat major (two flats), and the time signature varies between common time and 2/4. The vocal part uses a mix of soprano and alto voices. The piano part includes dynamic markings like *mf*, *poco a poco cresc.*, and *ff*. The lyrics describe the nature of science and its applications in various fields like medicine, industry, and agriculture.

はなからかふかくやえさく
いきうはもみじてかせきよ
さきめりはるまた一はつへてりそう一つ
あされりあきまたふゆ一へとうふじあ
つじのいろあざやかきぼうゆたか
やくもゆきかがやきせんとあがる
つねにともよむねをひらければしんあいわき
つねにともよちかひかさぬでふみゆくじゆ
あふれ・れいほうわれれいらの
のみちきよどうわれれいらの
poco a poco cresc.
あいだまわからこせかのまへく
われらありわれからありへぐきにう

校

歌

はなびら聲ふかくやえむへら歌きわたり

春また夏へ

希義ゆたかに

つねに友よ 梅をひづれば

親愛和氣あふれ
礼讓われら楽し

公孫樹は黃葉して風清く　ひるがえり

秋また冬へ

清江先生集

つねに友よ
誓ひ

踏みゆく自主の道 協同われら楽し

あゝ狂

世界の前に

われらあり われらあり 井草高校

